

桜井館跡 ほか

桜井館跡 第 3 次

西沢遺跡 第 25 次

山王遺跡 第 139 次

平成 26 年 3 月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。このことから当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用することはもとより歴史の解明に資する調査に努めているところです。

本書は、平成25年度に受託事業として実施した3件の発掘調査の成果を収録したものです。これらの調査においては、古墳時代から中世までの遺構や遺物が確認されました。

山王遺跡では、古墳時代前期の沖積地を利用して造られた水田跡や平安時代の畑跡とそれを区画する溝跡、西沢遺跡では、奈良・平安時代の堅穴住居跡、を発見しました。また、桜井館跡については、本市では希少な城館跡の調査となり、中世の土塁や空堀の発見によって中世社会の一端を垣間見ることができます。

市内の広大な遺跡に比べ、これらの調査した範囲はごくわずかですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の具体的な歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成26年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

- 1 本書は、平成25年度に受託事業として実施した発掘調査3件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 4 掘図中の高さは標高値を示している。
- 5 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 本書は、調査員全員の協議のもとに、Iを相澤清利、IIを小原一成、IIIを石川俊英が執筆し、編集は相澤が行った。遺構・遺物の図版作成は各担当者及び高橋純平・村上詩乃が、遺物の写真撮影は板垣泰之、村上詩乃、城口貴彰が担当した。
- 7 桜井館跡第3次調査出土の須恵器について、村田晃一氏（宮城県教育庁文化財保護課）からご教示を頂いた。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	桜井館跡第3次調査	1
II	西沢遺跡第25次調査	46
III	山王遺跡第139次調査	80

調査要項

1	調査主体	多賀城市教育委員会	教育長	菊地 昭吾
2	調査担当	多賀城市埋蔵文化財調査センター	所長	鈴木 典男
3	調査担当者	多賀城市埋蔵文化財調査センター	研究員	石川俊英 相澤清利 小原一成
			調査員	高橋純平 城口貴彰
4	調査協力者	小川幸男 志賀久造 エヌエスプランニング	株式会社大雄産業 株式会社澤木工務店 大東建託株式会社	
5	調査従事者	阿部純一 渥美静香 阿部孝子 阿部信夫 小井眞六 大泉清吉 大山邦夫 小川勝彦 長田拓海 小野寺常雅 片倉忠 鎌田修一 菊地清喜 工藤敦子 小松まり 小松美樹 紺野恵美 西條金三 櫻井良博 佐々木一郎 佐々木直正 佐々木正範 佐々木裕四郎 佐竹守雄 志賀定夫 須田英敏 千葉志津子 千葉美恵子 戸枝瑞枝 中島弘 濱田茂樹 平塚孝志 平塚武慶 福原寛 藤田恵子 星芳子 松川謙二 三浦侑士 山田理 矢島恒男		
6	整理従事者	遠藤睦美 佐藤幸恵 千葉郁美	村上和恵	

調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	桜井館跡第3次	中央1丁目104-1	5月9日～10月31日	1,628m ²	石川・相澤 高橋・城口
2	西沢遺跡第25次	浮島字高原150番	10月2日～12月19日	435m ²	小原・城口
3	山王遺跡第139次	山王字山王四区195-2、196-2、197-2地内	12月17日～1月31日	300m ²	石川・相澤

凡　　例

1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S A : 柱列跡 S B : 堀立柱建物跡 S D : 溝跡 S I : 壁穴住居跡 S E : 井戸跡
S K : 土壙 P it : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構

2 奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』(多賀城市教育委員会 2003)で報告している。

(1) 土師器坏

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

B I 類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

B II 類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

B III 類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

B IV 類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

B V 類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

(2) 土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器坏

I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

3 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政庁跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982)の分類基準に従った。

4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。

卷頭図版 多賀城市の遺跡地図と調査区の位置



I 桜井館跡第3次調査

1 遺跡の地理的・歴史的環境

本館跡は多賀城市役所の西側に位置し、東西約150m、南北約120mの舌状に張り出した小独立丘陵の突端部（標高約18m）に所在する。多賀城市内の中世城館跡は、現在15ヶ所（多賀城跡の作貫地区など）が知られているが、これらの大部分は破壊が著しく、遺構の不明瞭なものが多い。その中で本館跡は、丘陵南側が宅地造成によって削り取られているものの、北側は山林となっていたため大きな地形改変を受けずに現在に至っている。現況でも土塁と空堀が確認されることから市内でも希少な遺跡と言える。

文献資料によると、安永3年（1774年）の「風土記御用書出」留ヶ谷村の項には、

一古館 二

野田

一屋はきか館 堅四十間 横廿五間

当郡田中村御境

一桜井館 堅三十間 横十五間

※約54m×約27m



第1図 桜井館跡位置図（昭和39年作成）



桜井館跡周辺の空撮写真（昭和36年撮影）

右二館共誰御居館と申儀並年月共相知不申候事

との記載があり、江戸時代中頃には伝承として桜井館跡のことが人々の間に伝わっていたようである。また、当時の留守氏の家臣団編成を伝える「留守分限帳」(天文17年:1548年に作成)には、さくらい(桜井)の名字がみられる。多賀城町誌では、本館跡について留守家家臣黒川某のものと推測している。

次に、中世における周辺遺跡の様相についてみてみる。本遺跡の西側に隣接する高崎遺跡表地区(第17次調査)では、南北約35m、東西40m以上の溝によって区画された武士階級の屋敷跡を発見しており、高崎氏との関連が指摘されている。また、第11次調査では、15世紀頃から機能し16世紀末頃に埋め戻された大溝を発見している。これの廃絶に関しては天正18年(1590)頃、高崎氏の宗家である八幡氏が、国人領主である留守氏が居城としていた利府城から黒川郡大谷城への移転に伴ってこの地を離れたことと関係していると推測される。さらに、井戸尻地区には「館屋敷」とよばれる一画があり、発掘調査は行われていないが地表観察の結果、東西約70m・南北約60mの平場や土壘、空堀が確認できる。また、文献資料にこの頃の様子をみることができる。『留守家文書』の「斯波直持施行状」によると延文元年(1356)には宮城郡高崎村は八幡氏の所領であったことが確認でき、また『平姓八幡氏系譜』には、八幡氏一族の彦三郎盛忠が寛正6年(1465)四月にこの地に居住し、以来「高崎」の姓を名乗ったという記述がある。天正6年(1578)には高崎近江盛長が八幡氏の家督相続に功績をあげていることが記されている。なお盛長の法号は「化度寺殿」であり、現在の化度寺との関連がうかがわれる。

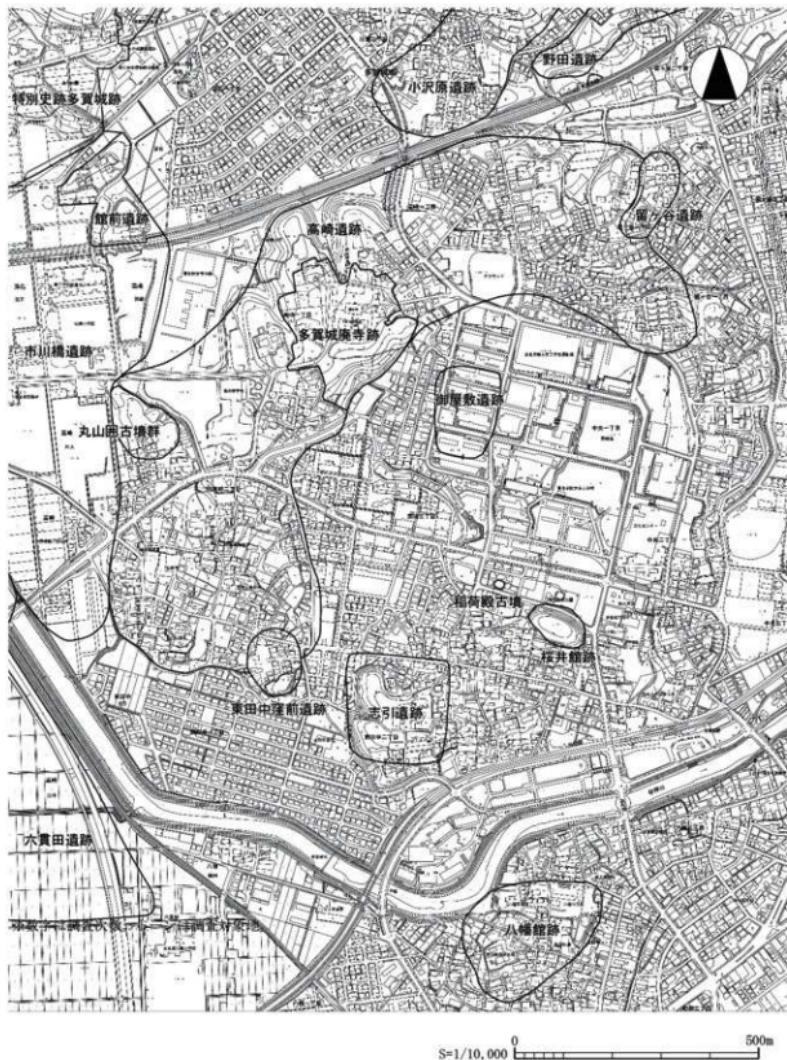
同じ丘陵上に位置する志引遺跡東田中地区には、碑面に三重塔が線刻された大型の板碑が存在する。正和3年(1314年)と嘉慶3年(1328年)の年号が記されている。県内では三重塔は唯一の例とされている。また、この丘陵上には、昭和40年代に幅3m、高さ1.5mほどの土壘が南北に走っていたことが確認されており、館跡の存在が考えられている。

このように中世における本遺跡とその周辺の様相は、城館の痕跡や板碑、文献資料等からある程度知ることができるが、この館跡については、その歴史的背景についての詳細は不明であり、今回の発掘調査によってその一端の解明が期待された。

2 調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成に伴うものである。平成24年6月15日に開発業者より当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、対象地全域を最大10mの切土をして宅地を造成するものであった。本館跡では、丘陵西側で南北方向に延びる土壘状の高まりや堀跡・平場と見られる遺構が確認されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構等の保存が計れないか協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定した。なお、開発面積が約4,600m²と広範囲に及んでおり、調査期間・経費積算を目的として確認調査を実施することとなった。その後、6月28日に地権者より発掘調査の依頼・承諾書の提出を受けて、調査の実施に至ったものである。調査は11月2日～平成25年1月31日に実施した。調査では、調査対象地内の12箇所(1～12区)に調査区を設定しS X 1土壘、S X 2堀跡、S X 3・4平場等を発見した。

確認調査の実績を踏まえて遺構の発見されたところを中心に調査区を再設定し、平成25年5月9日より本発掘調査を開始した。S X 3平場の東端から西へと表土剥ぎを進め23日には終了した。平場では地山面がすぐ検出され城館に伴う遺構は発見されなかった。24日から土壘の検出作業に入り縁辺にⅡ層の堆積が



第2図 桜井館跡と周辺の遺跡位置図

把握された(6月4日)。土壘の調査と並行して、5日より空堀の検出作業と丘陵北斜面の表土剥ぎをSX4平場付近から開始する。28日よりII層の除去を行い土壘本体の輪郭が把握できるようになる(7月18日)。8月3日には空堀を完掘する。8月9日、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。盆休みをはさんで、8月23・24日に市民を対象とした遺跡見学会を開催する。8月30日、調査区内の地形測量並びに遺構の平面測量を行う。9月3日より南端付近から土壘積土の除去を開始し、III層上面で南北方向の小溝群や東西方向のSD6溝跡を発見する。これらの遺構の完掘作業、図面作成が終了したのが9月20日である。ただちにIII層の除去を行いIV・V層上面での遺構検出業を行う。IV層上面では、SX8焼成遺構、SD7溝跡、V層上面ではS19・10堅穴住居跡を発見した。それらの遺構の精査、図面作成、写真撮影を同時並行で進め、最後にIV層の除去を行い調査が終了した(10月29日)。30・31日にかけて器材の撤収と現場内の環境整備を行いつつての業務を完了した。

3 調査成果

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は以下の通りである。

I 層：表土層で、厚さは2～5cmである。

II 1層：均質なぶい黄色土で、厚さは30cm未満である。SX1土壘の平場側縁辺付近、SX2空堀の埋土最上層、丘陵北斜面に分布する。土壘・空堀廃絶後の堆積層である。

II 2層：赤褐色ローム土粒を含む褐灰色土で、厚さは20cm未満である。SX1土壘の平場側縁辺付近、SX2空堀の埋土、丘陵北斜面に分布する。

III 層：やや粘性のある均質な褐灰色土で、厚さは20cm未満である。SX1土壘の積土下や丘陵北斜面に分布する。中世の旧表土層。

IV 層：固く締まりのある均質な褐灰色土で、厚さは10cm未満である。SX1土壘の積土下や丘陵北斜面に分布する。古墳時代後期～古代の旧表土層。

V 層：赤褐色ローム土の基盤層（地山）である。この下に灰白色の凝灰岩質層が続く。

(2) 発見した遺構と遺物

中世以降

今回の調査では、館跡に伴うものとして土壘、空堀（堀切）各1条、平場2ヶ所を発見した。（第4図）

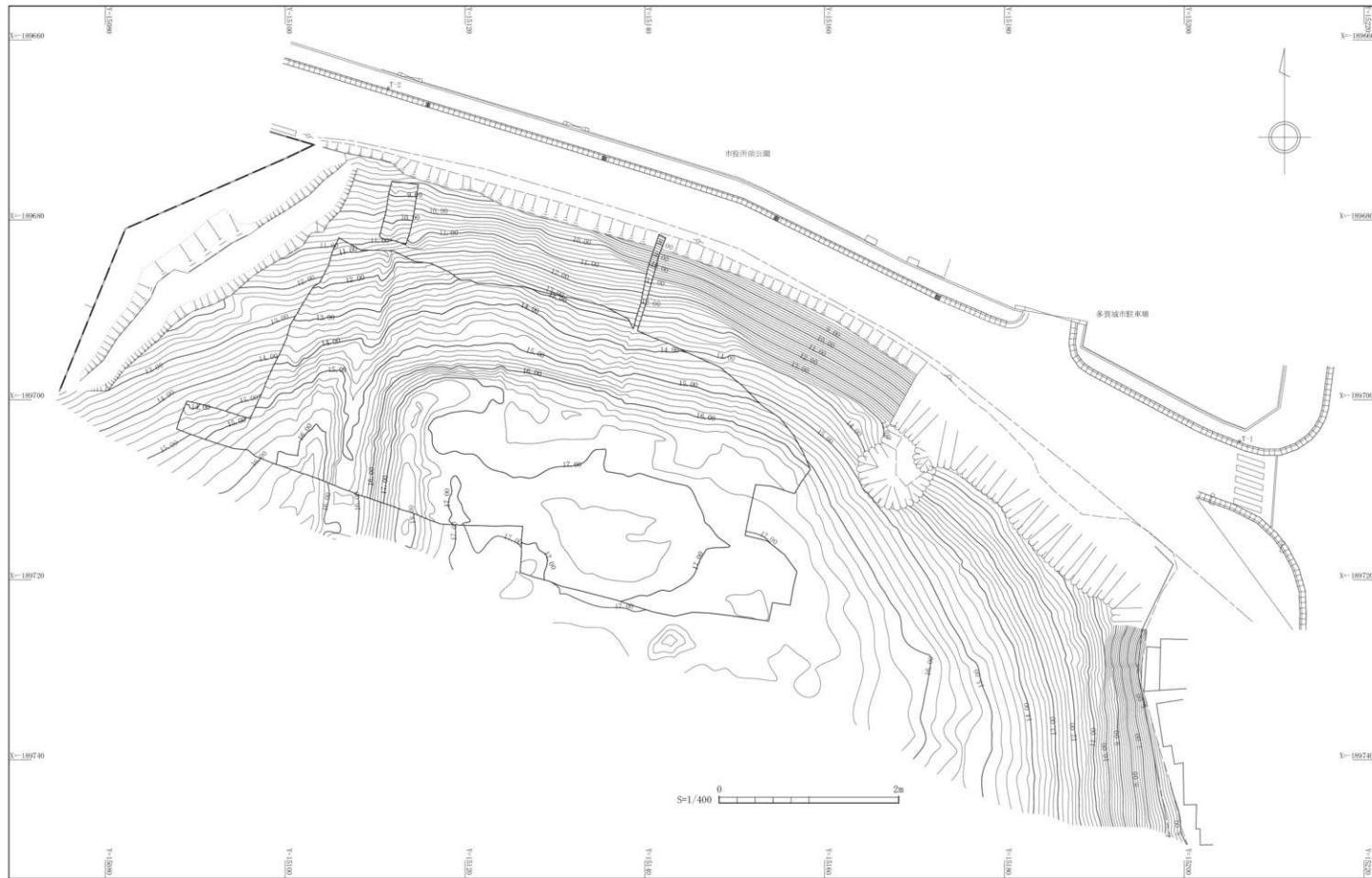
SX1土壘

【位置】東西に延びる独立丘陵東端部の平場の北西縁辺に造られた鉤型の土壘である。西側にSX2空堀を作り、

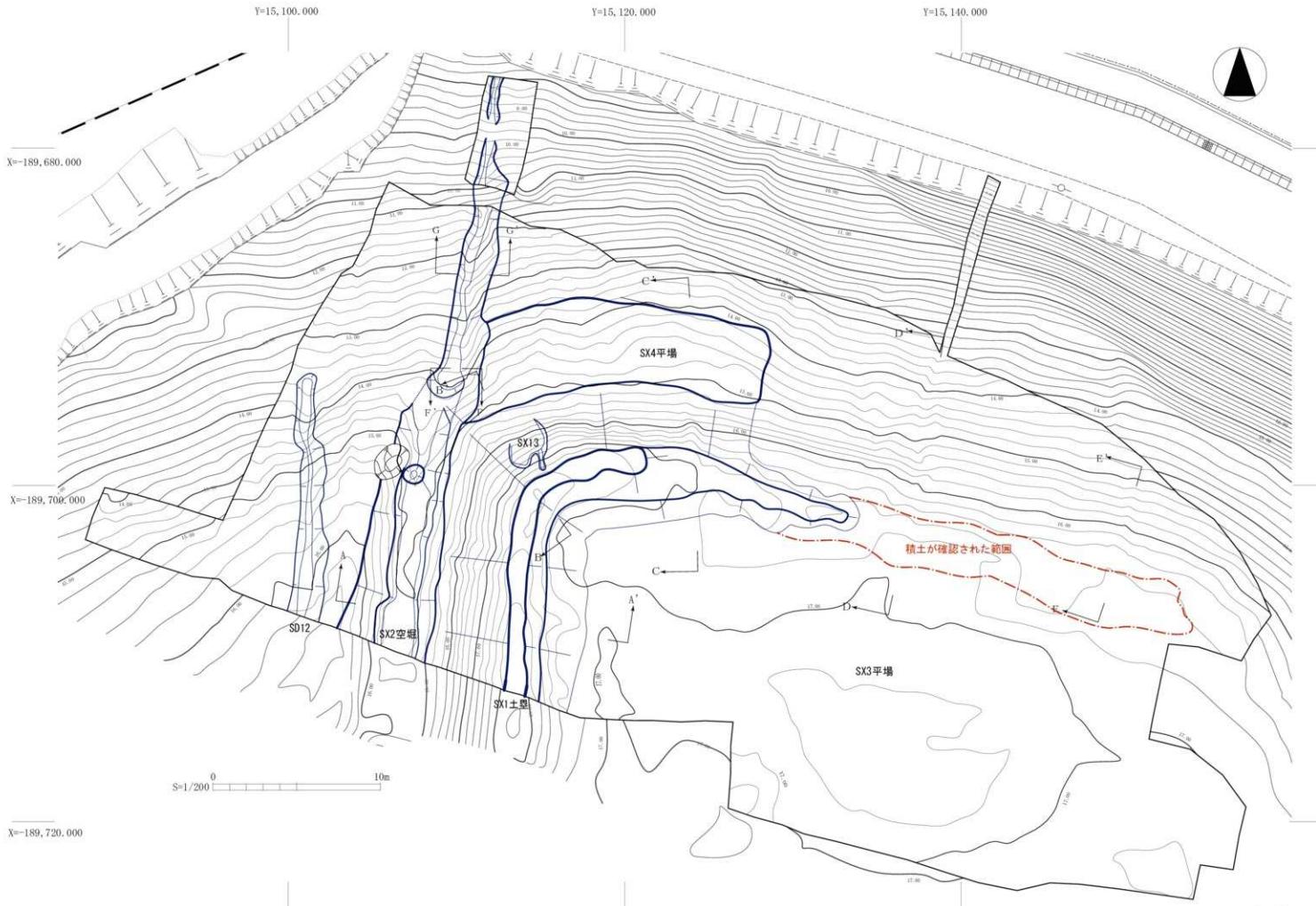
【構築面・重複】II1層におおわれIII層上に構築している。SX13土壘と重複しそれよりも古い。

【規模・方向】規模は西辺（南北方向）14m以上（地形測量で確認できた範囲では約19m以上）、北辺（東西方向）は東に行くに従って徐々に高さを減じていくが約20mまで高まりを確認した。基底幅は6～7m、残存高は西辺南端で約0.8m、コーナー付近で約1.15mである。方向は西辺でみると北で約5度東に偏する。

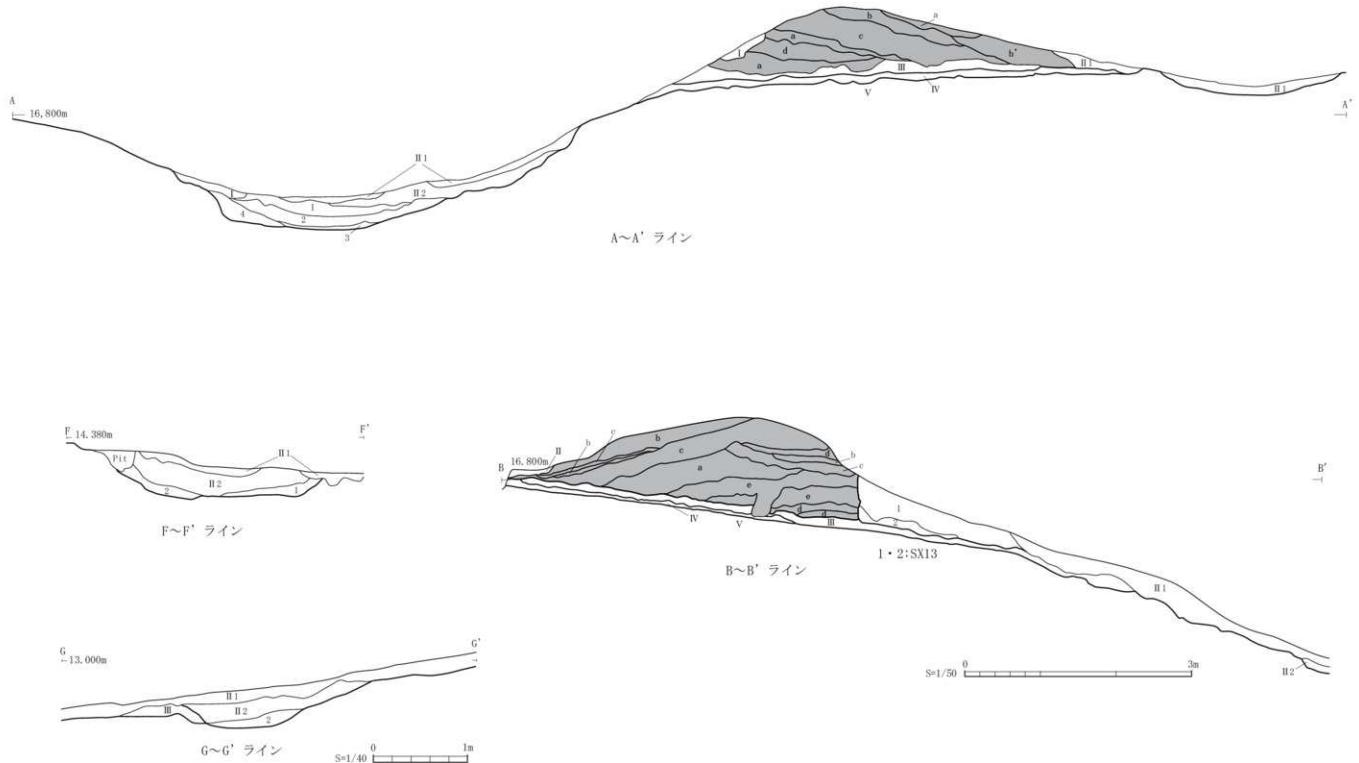
【積土】旧表土上（III層）に積み上げており、基本的に以下の5種類の土層の組み合わせによって構成されている。a：均質な赤褐色ローム（地山・V層上部）主体の層、b：III層を主体として、V層を粒・



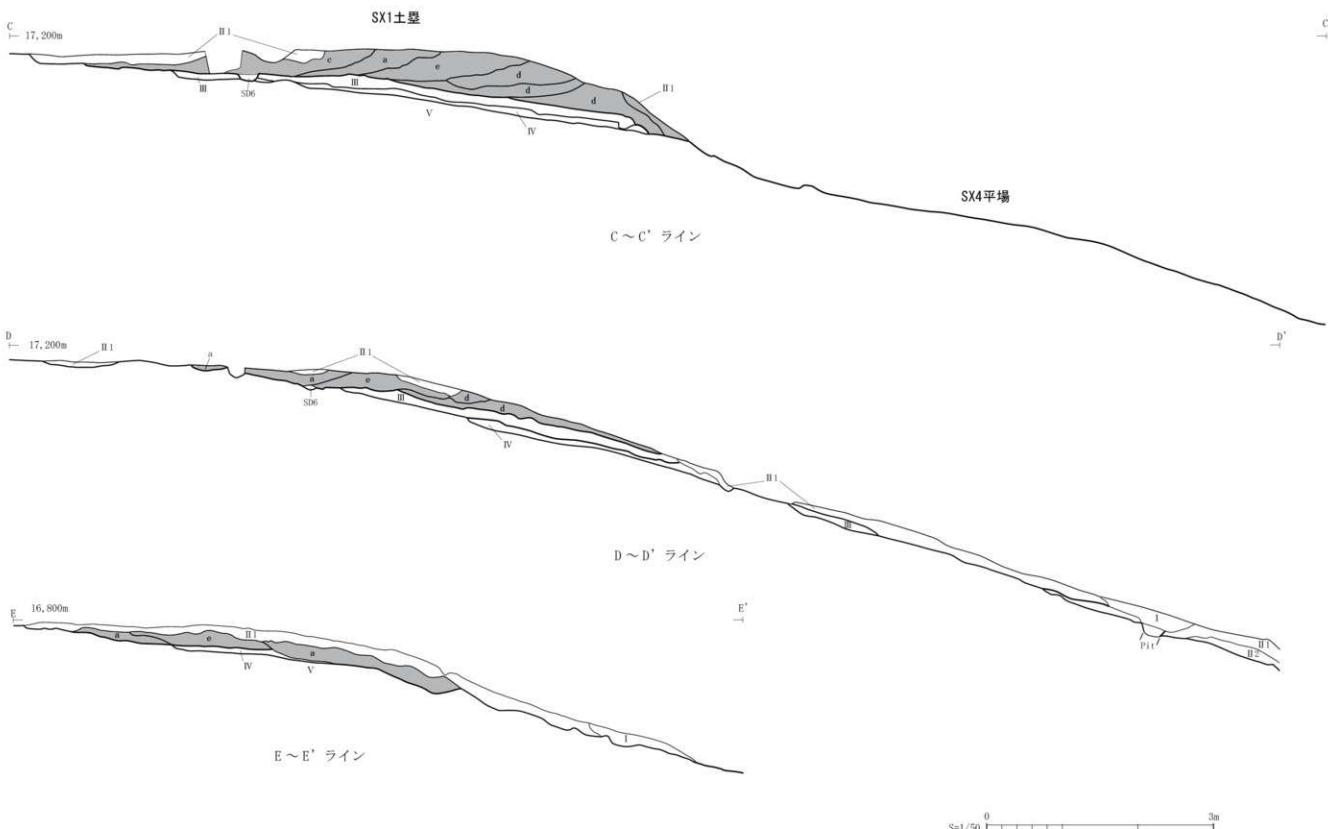
第3図 桜井館跡地形測量図



第4図 発見遺構平面図（中世以降）



第5図 SX1 土壌・SX2 空堀断面図



第6図 SX1土壠(南北)断面図

ブロック状に含む層、c : V層のロームと白色凝灰岩質土（地山・V層下部）ブロックがランダムに混じり合う層、d : III層とほぼ近似する均質な層、e : III層とV層がランダムに混じり合うが一部互層になるところもある層。積土は場所によって積み上げの順序が異なるが、下位層は平行に、上位層は斜めに積み上げている。西辺（南北方向）の土壘は、西側のS X 2空堀を掘削した土砂を積み上げて構築したものとみられる。なお、北辺（東西方向）の土壘の東方約20m付近まで積土と同様の土が約3mの幅を持って確認された。

【遺物】積土より土師器坏（A・B・V類）・鉢（A類）、須恵器坏（I類）・瓶・長頸瓶・短頸壺、甕、須恵系土器坏、古代の瓦、土製羽口？の破片が出土している。

S X 2 空堀（堀切）

【位置】S X 1土壘の西側に位置し、東西に延びる丘陵尾根を断ち切るように造られた空堀である。

【検出面・重複】II 1・2層におおわれIII層上面もしくはV層上面で検出した。重複関係はない。

【規模・方向】南北方向に延びており長さは35m以上を計り、土壘コーナー付近でやや東側へとずれる。

規模は上幅5.5～6.5m、下幅約1.3～2m、深さ1.3mである。土壘頂部と堀底面の高低差は約2.9mを計る。堀は地形の傾斜に沿って掘られており、南端と北端の底面の比高は約6.6mである。方向は北で約10度東に偏する。

【埋土】南端付近で埋土は4層に分けられ、1層がV層に由来する均質なローム土主体、2層が白色粒を層状に含む橙色砂質土、3層がにぶい黄橙色粘質土、4層がほぼ1層と同じ土である。粘質土と砂質土が交互に堆積する自然堆積である。これら埋土の上層には、東半を中心にII層が堆積する。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は内湾気味に立ち上がり、中位付近に段が認められる。

【遺物】土師器坏（B・V類）、鉢・甕（A類）、須恵器坏（IV類）・瓶、須恵系土器坏、古代の瓦の破片が出土している。

S X 3 平場

西側を土壘・空堀で区切られた東西約50m、南北20m以上の広さをもつ。南側の調査区外の部分を含めると南北約50mの正方形に近い平場であると考えられる。表土除去後すぐに地山面が検出された。土壘積土下及び北斜面において存在したII・III・IV層は確認できないことから、この平場については数10cmほど削平して造った平坦面であることが分かった。館跡に伴う遺構・遺物は発見されなかった。

S X 4 平場

土壘コーナー付近の北斜面に造られた郭輪で、地山を削り出して造成している。東西約16m、南北約5mの小規模なものである。表土除去後すぐに地山面が検出されたが、館跡に伴う遺構・遺物は発見されなかつた。

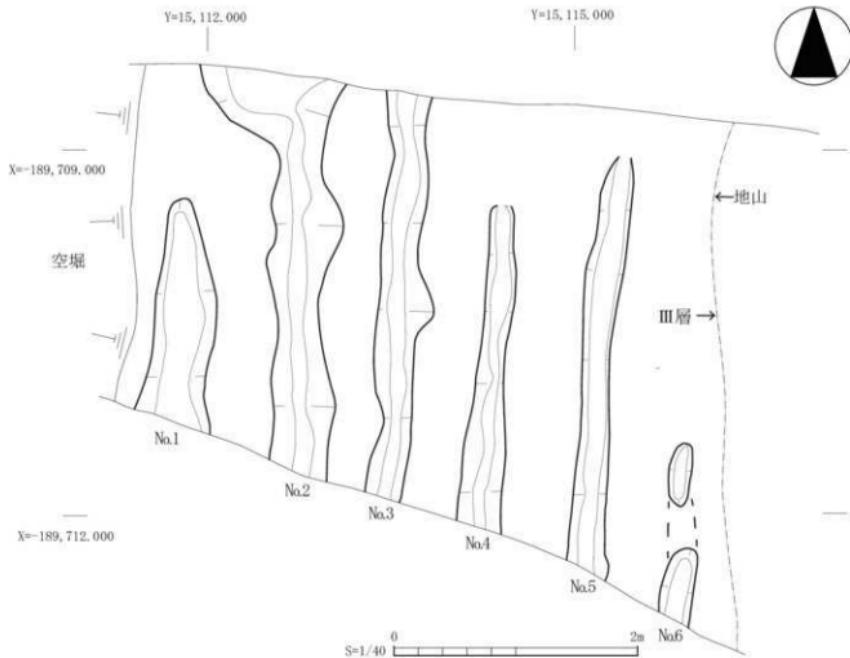
S D 5 小溝群

【位置】調査区南端の中央よりやや西寄りの丘陵平坦面に位置する。

【検出面・重複】土壘積土除去後のIII層上面（中世の旧表土面）で検出した。重複関係はない。

【規模・方向】6条検出し、確認できた長さは3m以上、幅10～110cm、深さ5～10cmである。平面形はNo. 4～6のように直線的な輪郭のものと、No. 1～3のように出入りがあるものとがある。方向はほぼ座標北に沿う。

【埋土】土壘構築時の積土によって埋められている。



第7図 SD 5 小溝群平面図

【壁・底面】底面は不整な凹凸がある。

【遺物】須恵系土器壺の破片が出土している。

SD 6 溝跡

【位置】調査区中央付近の丘陵平坦面に位置する東西溝跡である。

【検出面・重複】土壠積土除去後のⅢ層上面（中世の旧表土面）で検出した。重複関係はない。

【規模・方向】確認できた長さは14.7m以上、幅15～40cm、深さ10cm前後である。東端では鉤型に曲がる。方向は東で約8度南に偏する。

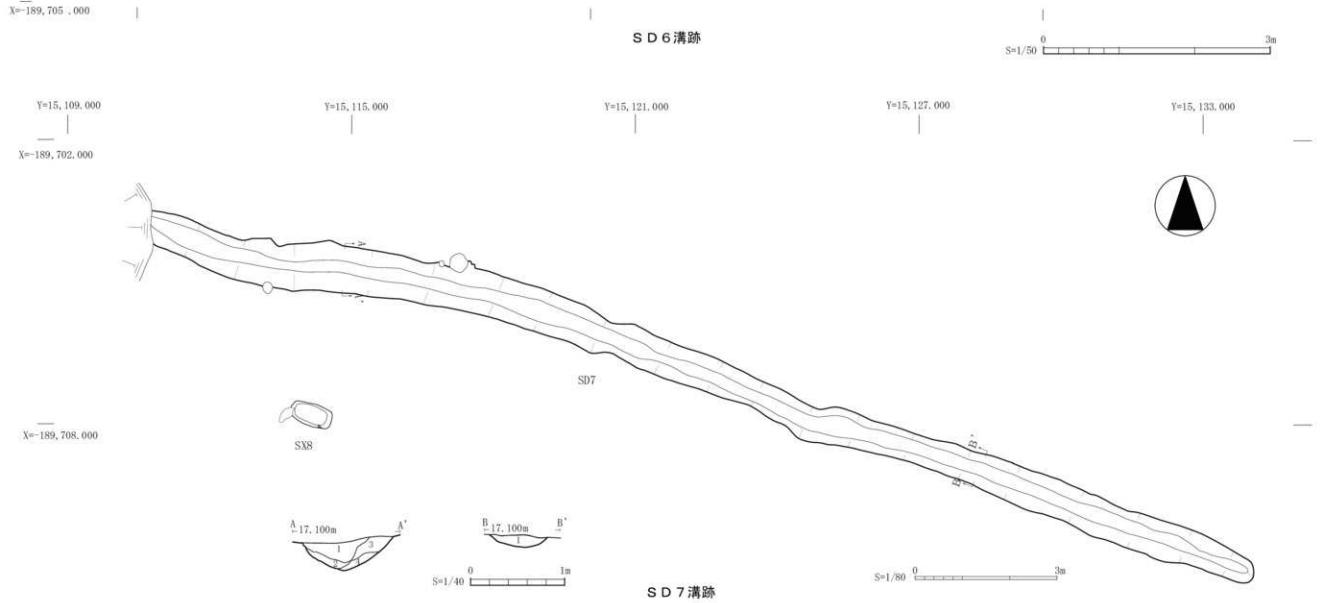
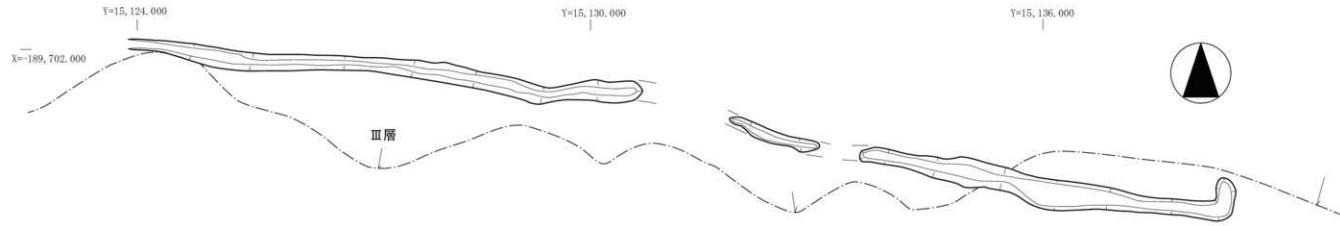
【埋土】土壠構築時の積土によって埋められている。

【壁・底面】底面は丸みを持ち、壁は内湾しながら立ち上がる。

【遺物】出土していない。



第8図 発見遺構平面図（中世：Ⅲ層上面検出遺構）



第9図 SD 6・7溝跡平面・断面図

S D12溝跡

【位置】調査区西端付近の丘陵北斜面に位置する南北溝跡である。

【検出面・重複】II 1層におおわれV層上面で検出した。重複関係はない。

【規模・方向】確認できた長さは14.5m以上、上幅1~2m、下幅0.2~0.8m、深さ5~20cmである。方向は北で約1度東に偏する。

【埋土】埋土はII 1層である。

【壁・底面】底面は平坦なところと丸みを持つところがあり、壁は緩やかに立ち上がる。

【遺物】出土していない。

S X13

【位置】S X 1 土塁コーナー付近の北斜面に位置する。

【検出面・重複】II 1層におおわれIII層上面で検出した。S X 1 土塁と重複しそれよりも新しい。

【平面形・規模・方向】不整方形を呈しているが、北側の立ち上がりは確認されなかった。南東隅付近には小溝がとりつく。長軸3m以上、短軸2.3m、深さは最大で0.6mである。

【埋土】2層に分けられ、1層が均質でしまりのない灰黄褐色土、2層が赤褐色ロームを含むにぶい黄褐色土である。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。

【遺物】出土していない。

古墳時代後期～古代

IV層上面で溝跡1条、焼成造構1基、V層上面で堅穴住居跡2軒を発見した。

S D 7 溝跡

【位置】調査区中央付近の丘陵頂部平坦面に位置する東西溝跡である。

【検出面・重複】IV層上面で確認された。重複関係はない。

【規模・方向】西半部はやや蛇行する。確認できた長さは24.4m以上、幅0.6~1m、深さ10~30cmである。方向は東で約17度南に偏している。

【埋土】東半部では均質なにぶい黄色土の単層であるが、西半部では4層に分けられ1~2層が東半部の土層に近似し、3~4層はV層が汚れたローム土主体である。

【壁・底面】東半部では皿状を呈するが、西半部では船底形ある。

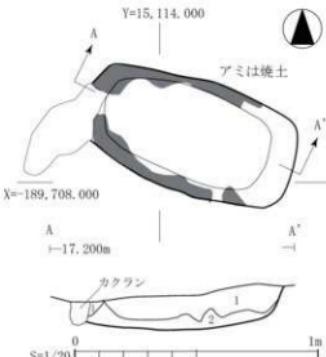
【遺物】土器器坏（B類）・高台付坏・甕（A類）の破片が出土している。

S X 8 焼成造構

【位置】調査区南半のやや西より丘陵頂部平坦面に位置する。

【検出面・重複】IV層上面で確認された。重複関係はない。

【平面形・規模・方向】隅丸長方形を呈する。長軸90cm、



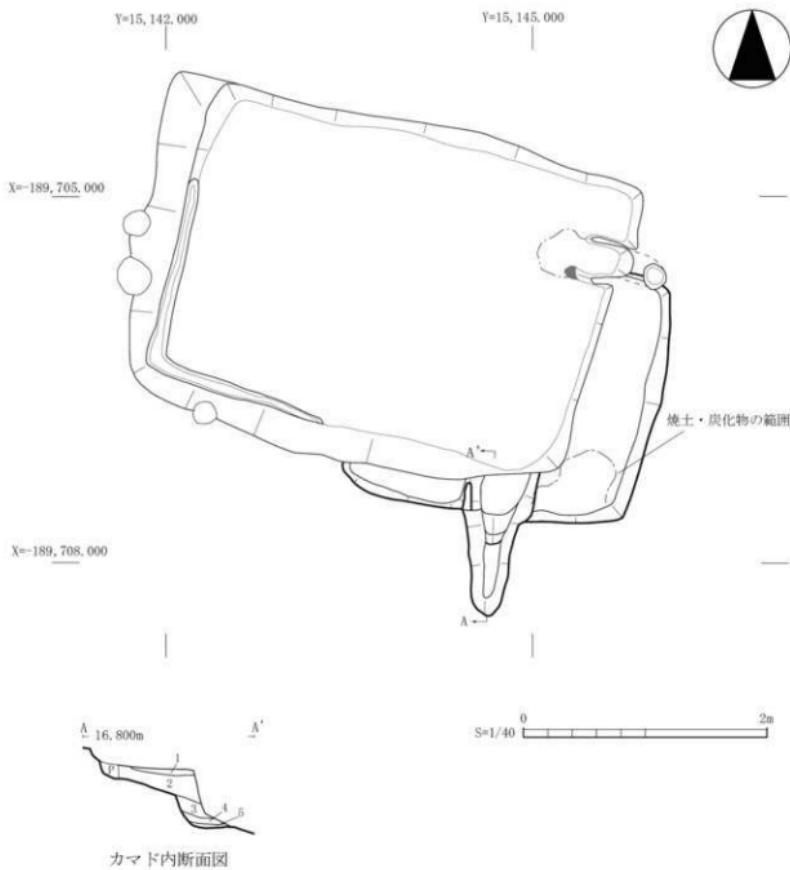
第10図 S X 8 平面・断面図

短軸35～46cm、深さ10～15cmである。方向は東で約19度南に偏している。

【埋土】3層に分けられ、1層が炭化物・焼土粒を若干含む固く締まりのあるにぶい黄橙色土、2層が炭化物層、3層が焼土層である。3層は東側の一部を除いた壁面に張り付くような状況で確認された。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。

【遺物】須恵器瓶の破片が出土している。



第11図 S19 穫穴住居跡平面・断面図



第12図 発見遺構平面図（古墳時代後期～古代）

S I 9 竪穴住居跡

【位置】丘陵頂部平坦面の北斜面際に位置する。

【検出面】III層におおわれV層上面で確認された。

【重複】S I 10竪穴住居跡と重複しており、それよりも古い。

【平面形・規模・方向】東西2.65m、南北2.2mのほぼ正方形で、方向は東辺でみると北で約9度東に偏している。

【埋土】2層に分けられ、1層が褐色土、2層が地山ブロックを含む褐色土である。

【壁の状況】下半は垂直に立ち上がるが、上半は内湾気味に開きながら立ち上がる。残存壁高は45～50cmを計る。

【床面の状況】地山を床面とする。

【カマド】南辺の中央付近に付設され、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部側壁は壊されており西側にわずかな立ち上がりが確認された。煙道部は長さ約80cm、幅30cmを計る。燃焼部底面と煙道部との間には約30cmの段差がある。カマド内堆積土は、5層に分けられ、1・2層が黄褐色土、3～5層が炭化物粒、焼土ブロックを含む褐色土である。燃焼部底面は被熱し赤色化していた。

【柱穴】確認されなかった。

【周溝】確認されなかった。

【遺物】床面より非クロ調整の甕が出土している。図示できないが頸部に段を有するものである。

S I 10 竪穴住居跡

【位置】丘陵頂部平坦面の北斜面際に位置する。

【検出面】III層におおわれV層上面で確認された。

【重複】S I 9竪穴住居跡と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・規模・方向】東西4m、南北2.7～2.8mの長方形で、方向は西辺でみると北で約14度東に偏している。

【埋土】2層に分けられ、1層が固く縮まりのある褐色土、2層がしまりのない黄褐色土である。いずれも自然堆積層である。

【壁の状況】内湾気味に開きながら立ち上がる。残存壁高は50～60cmを計る。

【床面の状況】地山粒を含む黄褐色粘土の掘方埋土（4層）を床面とする。

【カマド】東辺の北寄りに付設され、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部側壁は地山を削り出して作られており、南側の先端には石が据えられていた。煙道部は長さ約50cmで、その先端には径18cmの煙り出しピットがある。燃焼部底面と煙道部との間には約14cmの段差がある。燃焼部内及びその前面には焼土・炭化物粒の分布がみられた。

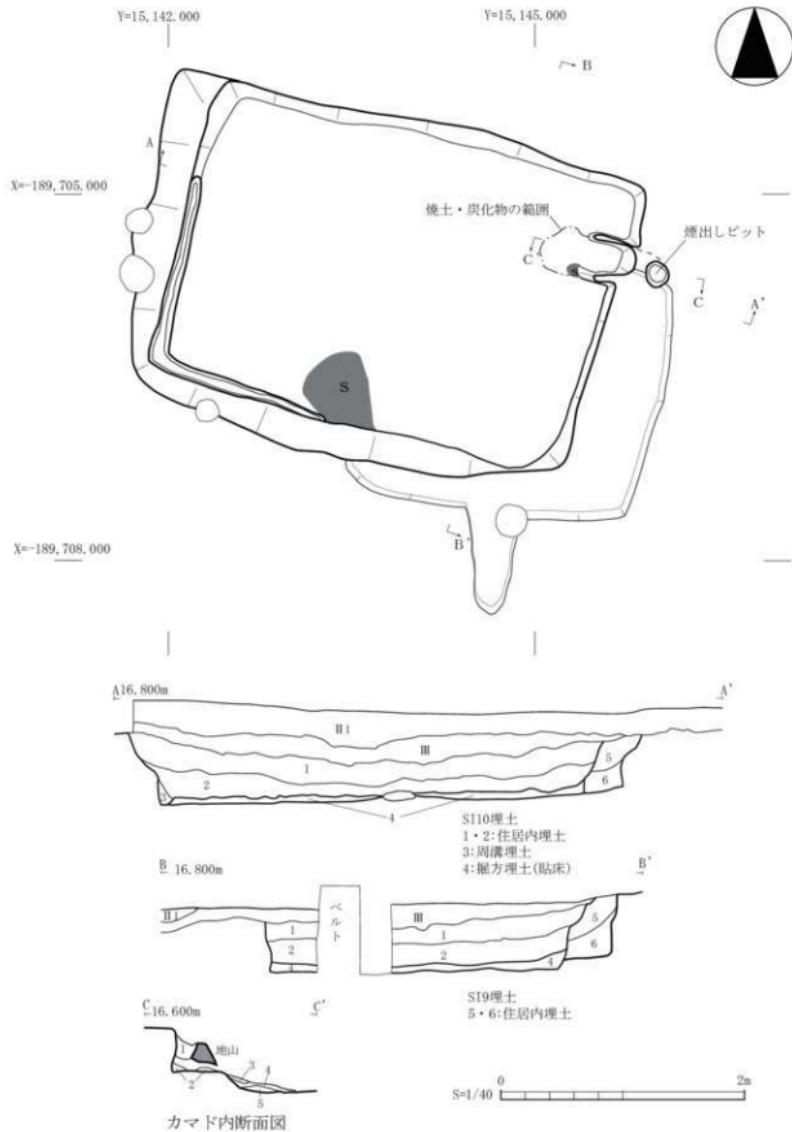
【柱穴】確認されなかった。

【周溝】部分的に南西コーナー付近で確認された。幅10cm前後、深さ約5cmで、埋土は褐色粘土（3層）である。

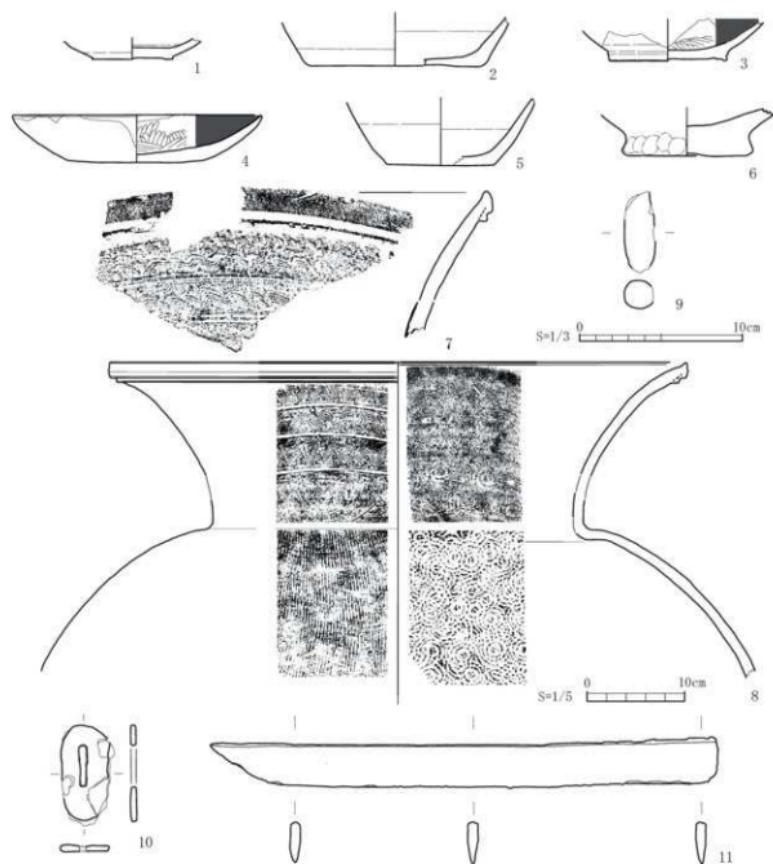
【遺物】1層より須恵器甕の体部破片が出土している。

その他堆積層出土の遺物

I層からは、刀（第14図11）、寛永通宝14点（写真図版13-5）、II層からは、土師器壺（A・B類）・甕（A・



第13図 S I 10 穫穴住居跡平面・断面図



(単位: cm)

番号	種類	造構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考	
			外面	内面							
1	須恵系土器 环	SX1土壌 積土	ロクロナデ 底部:回転系切り	ロクロナデ	- (4.9) 24/24	-	12-1	R4			
2	須恵器・坏	SX2型屋 理土	ロクロナデ 底部:静止系切り	ロクロナデ	- (10.4) 7/24	-	12-2	R3			
3	土師器 高台付坏	SD7 理土	ロクロナデ 底部:切り離し不明	ヘラミガキ、黒色処理	- 7.2 17/24	-	12-3	R6			
4	土師器・坏	磨土	磨滅のため不明	ヘラミガキ、黒色処理	(15.2) 1/24	(8.3) 24/24	2.9	12-4	R7	非ロクロ調整	
5	土師器・便	II層	ロクロナデ	ロクロナデ	- (6.6) 8/24	-	12-5	R5			
6	土師器・便	III層	指捺压痕	ナデ、黒色化	- 7.3 24/24	-	12-6	R2	非ロクロ調整		
7	須恵器・便	III層	ロクロナデ、口縁:突帯部1条沈線、腹部:棚推波状文X2、3条沈線×2	ロクロナデ	-	-	13-2	R9			
8	須恵器・便	II・III層 S110理土	ロクロナデ、口縁:突帯部1条沈線、底部:棚推波状文X3、2条沈線×3 体部:平行タタキ	同心円状当て具痕、ロ クロナデ	59.0 24/24	-	-	13-1	R8		
9	土製品	II層	長さ:4.8以上、径:1.75						12-7	R1	
10	鉢	II層	長さ:5.8、幅:2.7、厚さ:0.35						13-3	R2	
11	鉄刀	I層	長さ:31.2、幅:2.6、厚さ:0.6						13-4	R1	

第14図 出土遺物実測図

B類)、須恵器甕(第14図8)の破片、土製品(第14図9)、鏃(第14図10)、Ⅲ層からは、土師器壺(A類)・甕(A・B類)、須恵器甕(第14図8)、須恵器土器壺、古代の丸瓦の破片が出土している。

4 まとめ

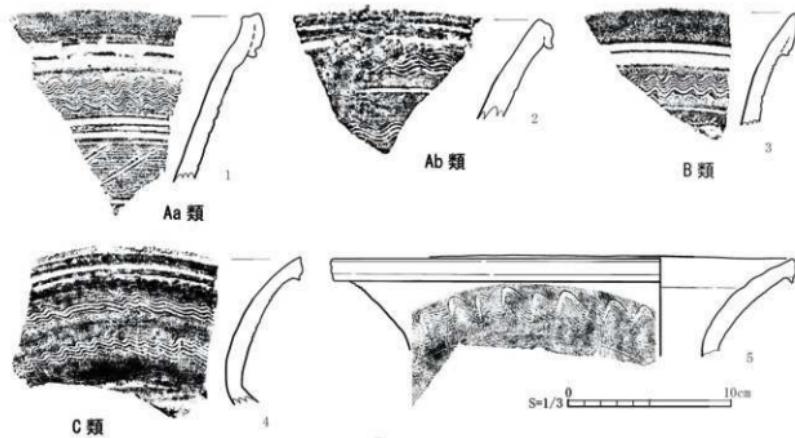
本館跡は出土遺物から直接遺構の年代を推定することは難しいが、土塁、空堀等の築城方法や文献資料及び放射性炭素年代測定結果から判断すると中世の城館と考えられる。館跡の立地する小丘陵は、南に延びる舌状台地の東端にあり、立地的には東西南北を見渡せるところに位置している。空堀(堀切)は尾根を切断するように造られており、これで区切られる平場(S X 3)は東西・南北約50mの独立した空間を作りだしている。土塁はこの西辺と北辺を囲むように造られていたが、東西方向の土塁は途中から徐々に高さが減じて平場と同じレベルの平坦面となっていた。この部分には土塁基底幅と同じ幅で積土が連続して約20mにわたって確認されている。この部分については、元々土塁があったが何らかの要因(人為的あるいは自然の營力)で崩壊し基底部のみが残存したものと考えられる。したがって、土塁の構築当初は、東西約40mの規模を持っていたものと推察される。また、この施設で区画される平場(S X 3)では、建物跡など居住に関連する遺構が全く発見されず、日常的に人々が暮らす場ではなかったと考えられる。このような施設は、防衛的な役割を果たすとされており、周辺を監視する場や有事に備えた場などに使われていたと推察される。

中世(おもに鎌倉・室町時代)における多賀城市域は、おおむね旧七北田川(新田地区の南側を東流し砂押川と合流していた)を境として、北側に留守氏、南側に八幡氏の所領があったとされている。本館跡は旧七北田川をはさんで八幡氏の居館である「八幡館」に近接する位置関係にある。室町幕府成立時には、八幡氏と留守氏の間でも抗争があり、その後、八幡氏は留守氏に服属し家臣となっている。このような地理的・歴史的環境のなかで本館跡の位置づけがなされるものと思われるが、その具体的な背景については、詳細な時期の特定ができなかったこともあります、今後の課題としたい。

土塁積土除去後のⅢ層上面では、SD 5小溝群、SD 6溝跡を発見した。小溝群は畑の畝溝として理解されているものであることから、この地は耕作域から館跡へと土地利用が変わったことになる。SD 6溝跡については、Ⅲ層の残存範囲や土塁の裾部とほぼ一致することから、土塁構築に関わるものと推察される。また、S X 13、SD 12溝跡は、城館の時期に伴う可能性もあるが、確証が得られないで、ここでは中世以降としておく。

古墳時代後期～古代の遺構については、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒、焼成遺構1基、古代の溝跡1条を発見した。

S I 10竪穴住居跡からは非ロクロ調整の土師器と須恵器甕の破片が出土している。このうち須恵器甕は第14図8の櫛描波状文を持つ甕と同一個体である。したがって、この甕の年代を検討することにより住居跡のおおよその年代も知ることができる。この甕は口縁径が約60cmで口縁から肩部までの高さが17cmと大型なものである。口縁部は粘土を貼り付けて肥厚部をつくり、上端はつまみ出し、下端は沈線をまわして突帯縁をしている。頸部の文様は、2条1対の平行沈線によって3段に区画されその間に櫛描波状文が配される。体部外面には平行タタキ痕、内面には同心円状の当て具痕が認められる。第14図7はⅢ層からの出土であるが、特徴が類似するので合わせて取り上げる。口縁部は8と同様に肥厚部をつくり、下端は沈線をまわして突帯縁をしているが、上端はやや丸みを持ち、断面は扁平な半円形を呈する。頸部の文様は、



第15図 高崎古墳群SR32窓跡と高崎遺跡SR1678窓跡出土遺物

3条1対の平行沈線によって2段に区画されその間に櫛描波状文が配される。櫛描波状文は上段が2段、下段が1段である。両者とも外面に自然釉がみられ、灰黒色を呈し焼成は良好である。胎土も石英・白色粒を含み緻密である。

さて、このような特徴を持つ甕は、おおむね7世紀代の年代が求められる。近年、多賀城市内でもこの時期の遺構・遺物が多数検出されており、年代や系統など詳細な検討が行われている。高崎古墳群第11次調査では、須恵器を焼成した地下式穴窓(SR32)が1基検出されている。出土遺物には蓋、甕、瓶があり蓋と甕が大半を占めている。これらの年代は市川橋遺跡伏石地区のSD6517区画溝、八幡地区SK6777大土壠出土須恵器(宮城県教委2009)との類似性から6世紀末~7世紀第1四半期に位置付けている(多賀城市教委2011a)。また、近隣の高崎遺跡第56次調査でも窓跡1基(SR1678)が発見されており、坏・坏蓋・盤・瓶・甕と加工焼台が出土している。坏類の特徴や窓跡の類似性から、福島県善光寺遺跡等の資料に対比して7世紀前半の古い段階に位置付けている(多賀城市教委2007)。いずれの遺跡からも甕が出土していることから、これらと比較して年代の検討を行ってみたい。まず、高崎古墳群第11次調査出土の甕は、口縁部の形態からA・B・Cの3類に、さらにA類は突帯縁の幅でAaとAbの2類に分けられている。A・B類(第15図1~3)は、口縁部を肥厚させて突帯縁を作り出している(註)。A類は口縁上端部に軽く窪む平坦面が巡っており、その内面側にはつまみ出しによる突帯を持つ。下端は沈線をまわして突帯縁をしている(上下端2条突帯口縁)。B類は口縁上端部に平坦面や突帯はなくやや先尖り状の形状である。下端はA類同様沈線をまわして突帯縁をしている(下端1条突帯口縁A)。C類(第15図4)は、口縁下端部を外側につまみ出して突帯縁を作り出している(下端1条突帯口縁B)。高崎遺跡第56次調査の第15図5は、C類に類似しているが、相違する点もあり、高崎古墳群よりもやや年代が下るものとされている

註:報告書中においては、「口縁端部に近づくと外側に折り返して厚い突帯縁をつくっている」としているが、再観察の結果、粘土紐を貼り付けて口縁を肥厚させていることが判明した。

(多賀城市教委2011 a)。

ここで本例と高崎古墳群、高崎遺跡の甕と比較してみると、口線上端部の形状や突帯縁の幅に少なからず相違が認められるが、本例 7 が B 類の系列、8 が A 類の系列上にあるものと考えられる。A 類の文様区画沈線は、太い工具で 2 条平行沈線間が幅広で深く描かれるのに対して、本例は沈線間が狭く浅い。櫛描波状文の波数は、Aa 類が 11 条、Ab 類が 7 ~ 9 条、B 類が 5 条、C 類が 7 条、本例 7 が 4 条、8 が 6 条である。A 類のみが他に比べ多条であることがわかる。頸部外面の器面調整では、A・B 類に文様施文前に横位のカキメが施されるが、本例には見られない。体部内面の当て具痕では、高崎古墳群例は同心円状になるところも一部あるが、半円状もしくは弓状になるものが多い。一方、本例は同心円状のものが丁寧に押されている。胎土については、本例は石英・白色粒を含み緻密であるが、高崎古墳群、高崎遺跡例は白色粒が多く、砂粒もやや多く含む違いがある。また、全体的に本例よりも高崎古墳群、高崎遺跡例のほうが厚手に作られている。

以上の比較検討から、本遺跡の甕は、近隣の 2 窯跡とは異なる属性要素も認められることから、他の窯跡から供給された可能性が極めて高い。すると同時期の窯の違いによるものなのか、あるいは新旧の型式(形態)差によるもののかが問題となろう。櫛描波状文の波数、カキメの有無や突帯縁の幅からすると高崎古墳群に比べ本例が後出の様相を持っているとみることもできるが、比較した個体数が少ないこともあり、さらなる良好な資料の追加を待って検討することしたい。

したがって、S I 9・10 懸穴住居跡の年代については、7 世紀前半頃とやや幅を持ってみておきたい。なお、放射性炭素年代測定(附章参照)では、S I 10 懸穴住居跡埋土試料が 7 世紀中葉の時期とされており、出土資料の年代観よりもやや新しい。

S X 8 焼成構の年代は、出土遺物が須恵器の小破片であるため特定できないが、埋土試料の放射性炭素年代測定では、7 世紀前半の時期とされている。S I 9・10 懸穴住居跡の出土資料からみた年代観とはほぼ一致する。

S D 7 構跡は、ロクロ調整の土師器が出土していることから、8 世紀後葉以降の古代の範疇に収まる時期とみておきたい。

引用・参考文献

- 1 多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第17次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第61集 2001
- 2 多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第56次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第89集 2007
- 3 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成22年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第103集 2011 a
- 4 多賀城市教育委員会『高崎古墳群ほか』多賀城市文化財調査報告書第104集 2011 b
- 5 宮城県教育委員会『市川橋遺跡の調査－県道泉塙釜線開通遺跡調査報告書VII－』宮城県文化財調査報告書第218集 2009
- 6 仙台市市教育委員会『沼向遺跡第4～34次調査－宮城県仙台港背後地地区面整理事業関係遺跡発掘調査報告書III－』仙台市市文化財調査報告書第360集 2010
- 7 加藤孝・野崎準「多賀城市内の館跡」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第2号 1973
- 8 多賀城市誌編纂委員会『多賀城市誌』1967
- 9 多賀城市『多賀城市史 原始・古代・中世』第1巻 1997

附章 桜井館跡における放射性炭素年代測定（AMS測定）報告

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

桜井館跡（第3次調査）は、宮城県多賀城市中央1丁目104-1に所在する。測定対象試料は、基本層及び遺構から出土した木炭合計6点である（表1）。

基本層第Ⅲ層は中世の旧表土層とされている。SX1は館跡を構成する土壌で、中世と推定されている。SI10堅穴住居跡は古墳時代後期とされ、SX8焼成遺構は出土遺物が少片であるため詳細は不明である。

2 測定の意義

試料No.1～3の測定により中世城館の築造年代を、No.4～6の測定により中世城館以前の遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて

10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度とともに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の歴年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

基本層第III層出土試料の ^{14}C 年代は、上面出土のNo. 1が $370 \pm 20\text{yrBP}$ 、層中出土のNo. 2が $5610 \pm 20\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、No. 1が $1464 \sim 1618\text{cal AD}$ 、No. 2が $1303 \sim 1394\text{cal AD}$ の間に各々複数の範囲で示される。上面出土のNo. 1は、層中出土のNo. 2より新しい年代となっている。

中世城館を構成するSX1土塁出土試料No. 3の ^{14}C 年代は $480 \pm 20\text{yrBP}$ 、历年較正年代 (1σ) は $1421 \sim 1441\text{cal AD}$ の範囲で示される。

中世城館以前の遺構出土試料の ^{14}C 年代は、S I 10堅穴住居跡出土のNo. 4が $1360 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 5が $1380 \pm 20\text{yrBP}$ 、S X 8焼成遺構出土のNo. 6が $1430 \pm 20\text{yrBP}$ である。S I 10堅穴住居跡出土の2点の値は、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致する。历年較正年代 (1σ) は、No. 4が $650 \sim 669\text{cal AD}$ 、No. 5が $642 \sim 665\text{cal AD}$ 、No. 6が $613 \sim 646\text{cal AD}$ の範囲で示される。

これら6点の試料の年代値は、層位や出土遺物から推定される時期におおむね整合する (佐原2005)。試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132063	No. 1	基本層第III層上面	木炭	AAA	-26.00 ± 0.44	370 ± 20	95.55 ± 0.27
IAAA-132064	No. 2	基本層第III層中	木炭	AAA	-25.43 ± 0.55	610 ± 20	92.66 ± 0.25
IAAA-132065	No. 3	SX1土壌(東西) 粘土中	木炭	AAA	-26.23 ± 0.52	480 ± 20	94.14 ± 0.27
IAAA-132066	No. 4	SI10堅穴住居跡 埋土2層	木炭	AAA	-24.61 ± 0.42	1,360 ± 20	84.41 ± 0.26
IAAA-132067	No. 5	SI10堅穴住居跡 贊床埋土	木炭	AAA	-23.40 ± 0.70	1,380 ± 20	84.20 ± 0.26
IAAA-132068	No. 6	SX8焼成遺構 埋土	木炭	AAA	-24.63 ± 0.53	1,430 ± 20	83.70 ± 0.25

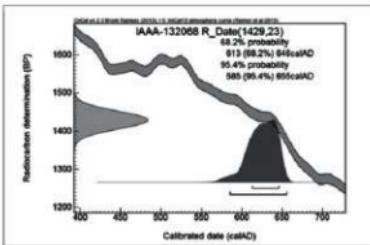
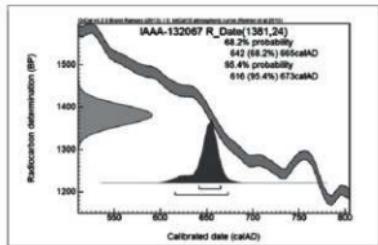
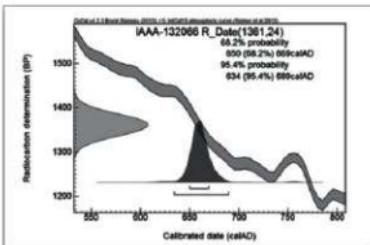
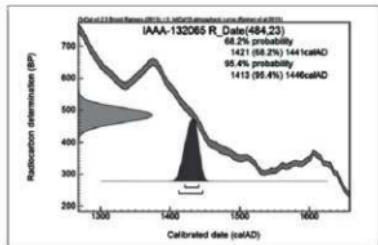
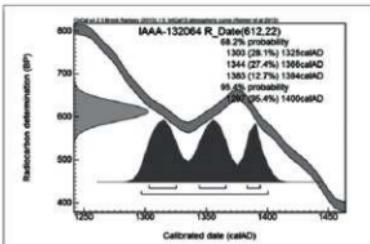
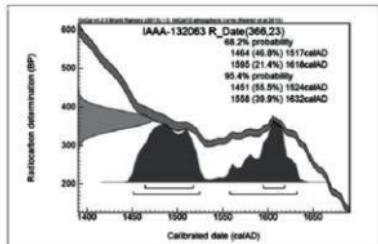
[表19]

表2 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ 曆年年代範囲		2σ 曆年年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-132063	380 ± 20	95.35 ± 0.26	366 ± 23	1464calAD - 1517calAD (46.8%) 1595calAD - 1618calAD (21.4%)	1451calAD - 1524calAD (55.5%) 1558calAD - 1632calAD (39.9%)		
IAAA-132064	620 ± 20	92.58 ± 0.23	612 ± 22	1303calAD - 1325calAD (28.1%) 1344calAD - 1366calAD (27.4%) 1383calAD - 1394calAD (12.7%)	1297calAD - 1400calAD (95.4%)		
IAAA-132065	510 ± 20	93.90 ± 0.25	484 ± 23	1421calAD - 1441calAD (68.2%)	1413calAD - 1446calAD (95.4%)		
IAAA-132066	1,360 ± 20	84.48 ± 0.25	1,361 ± 24	650calAD - 669calAD (68.2%)	634calAD - 689calAD (95.4%)		
IAAA-132067	1,350 ± 20	84.48 ± 0.23	1,381 ± 24	642calAD - 665calAD (68.2%)	616calAD - 673calAD (95.4%)		
IAAA-132068	1,420 ± 20	83.76 ± 0.23	1,429 ± 23	613calAD - 646calAD (68.2%)	585calAD - 655calAD (95.4%)		

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



〔図版〕暦年較正年代グラフ（参考）



桜井館跡の遠景（北東より）



調査区全景（上空東より）



調査区全景（上空より）



SX1土壠・SX2空堀全景（上空より）

写真図版 2



S X 1 土壠全景 (西より)



S X 1 土壠と S X 2 空堀
(南より)



S X 1 土壠と S X 2 空堀
(西より)



S X 1 土壠と S X 2 空堀
(南西より)



S X 2 空堀 (北より)



S X 2 空堀北半部 (南より)



S X 2 空堀南端付近土層
堆積状況 (北より)



S X 2 空堀中央付近土層
堆積状況 (北より)



S X 2 空堀調査状況



S X 1 土塁A～A' ライン積土断面
(南より)



S X 1 土塁B～B' ライン積土断面
(東より)



S X 1 土塁C～C' ライン積土断面
(北東より)



S X 3 平場全景（東より）



S X 4 平場全景（西より）



S X 4 平場全景（東より）



S D 5 小溝群全景（南東より）



S D 6 溝跡全景（東より）



S X13全景（北東より）



S D 7 溝跡全景（東より）



S D 7 溝跡・土層堆積状況
(西より)



S I 10 壺穴住居跡全景 (西より)



S I 10 壺穴住居跡・カマド内
土層堆積状況 (北より)



S I 9 壺穴住居跡全景 (北より)



S X 8 焼成遺構検出状況（東より）



S X 8 焼成遺構完掘状況（東より）



S X 8 焼成遺構土層堆積状況（南より）



1



2



3



4



5



7



6

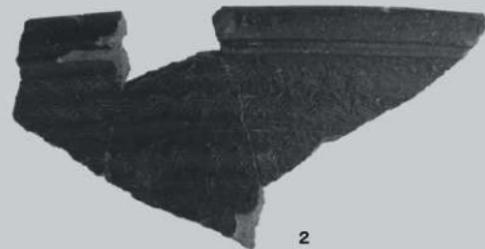
- 1 : 須恵系土器环 (第14図 1)
2 : 須恵器环 (第14図 2)
3 : 土師器高台付环 (第14図 3)
4 : 土師器环 (第14図 4)
5 : 土師器臺 (第14図 5)
6 : 土師器臺 (第14図 6)
7 : 土製品 (第14図 9)



1



3



2



4



1 : 須恵器壺 (第14図8)
2 : 須恵器壺 (第14図7)
3 : 銅 (第14図10)
4 : 鉄刀 (第14図11)
5 : 寛永通宝 (1層出土)



5

II 西沢遺跡第25次調査

1 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は市北部の市川・浮島地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部にあたり、東西450m、南北700mの範囲を占めている。標高は北側丘陵尾根付近で約46m、南側の沖積地と接する付近で約6mである。遺跡全体をみると北から南に向かって低くなる緩斜面の合間に、大小の沢地形が複雑に入り組んだ景観を呈している。今回実施した調査区は遺跡のおよそ中央部にあり、北側は標高32.8m、南側は標高28.9mで比高差約4mの斜面上に位置している。

本遺跡内ではこれまで24度に及ぶ発掘調査を実施しており、平安時代の数多くの遺構・遺物を発見している。主な成果をみると、第2次調査区では一辺8mを超える平安時代の堅穴住居跡や、桁行5間の大型掘立柱建物跡、倉庫と見られる総柱の掘立柱建物跡を確認している。また、第3次調査区では、東側の沢地形に接して、平安時代の堅穴住居跡や鍛冶工房跡が営まれていたことが明らかとなっている。これらは、遺構の規模や性格などから、いずれも西側に隣接する多賀城跡との関連性が想定しうる。

一方、第2次調査区では中世頃の整然と配置された30棟を超す掘立柱建物群を確認しており、立地も含め沖積地で確認されている大規模な屋敷群との構造的な違いも注目される。



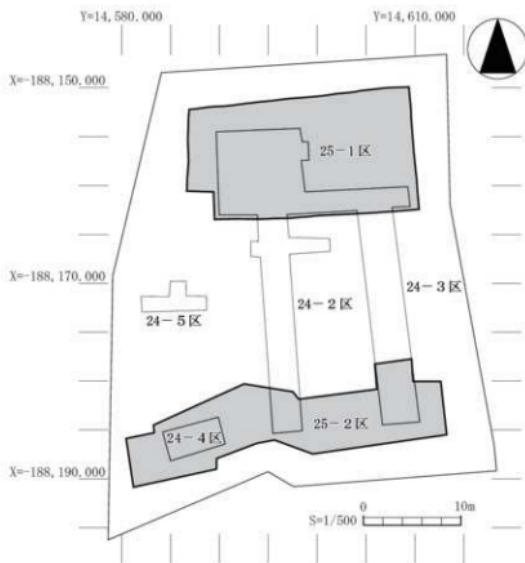
第1図 調査区位置図

2 調査に至る経緯と経過

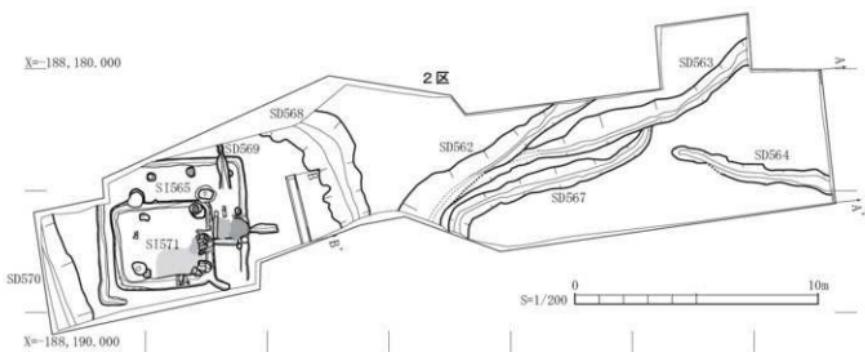
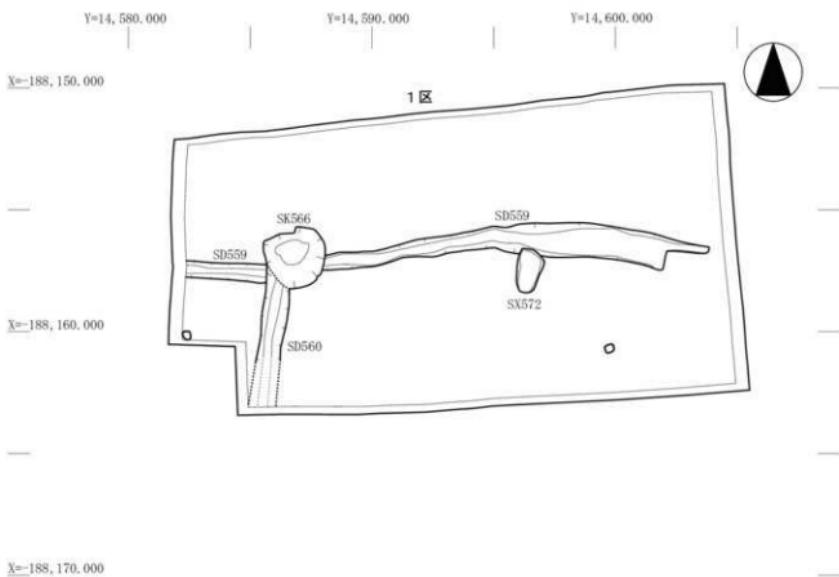
本件は、集合住宅新築に伴う本発掘調査である。平成25年7月、地権者より当該区における集合住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、開発範囲の南側約3分の2を盛土、北側約3分の1を切土し、北側に基礎工事の際に最深87cmの掘削を伴う建物、南側には道路と擁壁を建築することとなっていた。本調査区の西側隣接地の調査成果では、地表面から遺構検出面までの深さは30～90cmであることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺構の分布と密度を確認するための調査を実施することに決定した。その後、8月6日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて確認調査を実施した。

第24次の確認調査は、建物部分を東西に横断する1区、調査区を南北に縦断する2・3区、道路部分の西側を確認する4区、調査区西側の切土部分の5区の5箇所に調査区を設定した。調査の結果、1区からは溝跡と土壤、2・3区からは溝跡、4区からは堅穴住居跡が発見されたため、計画変更等により遺構の保存が困難ないか協議を行ったが、申請どおりの計画で着手することに決定した。その後、9月27日に本発掘調査の委託契約を締結し、調査を実施した。

調査は10月2日から開始し、4日までかけて重機で表土を除去すると同時に現場の環境整備と2区の遺構検出作業を行った。台風26号の影響により作業に遅れが出て、18日に2区東側の遺構検出状況の写真撮影を行い、遺構の掘り下げを進めた。その後も悪天候と台風の影響に悩まされながらも、1区と2区東側の遺構精査・記録と西側の遺構検出を進めた。11月7日に2区西側のS I 565堅穴住居跡の検出状況の写真撮影を行い、床面まで掘り下げたところ、それよりも古いS I 571堅穴住居跡の存在を確認した。11月20日、S I 565堅穴住居跡の完掘状況、11月22日には1区検出遺構の検出状況、11月29日にはS I 571堅穴住居跡の検出状況の写真撮影を行い、引き続き遺構の精査・記録を進めた。12月12日にはS I 571堅穴住居跡の完掘状況の写真撮影を行い、図面の作成を進め、12月19日に埋め戻して全ての作業を終了した。



第2図 調査敷地と調査範囲



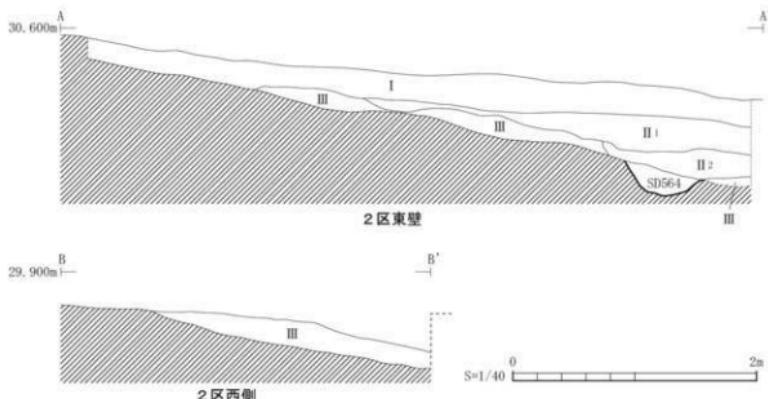
第3図 造構配置図

3 調査成果

(1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

- I 層：調査区全域に堆積する現代の表土で、厚さは1区で15cm～60cmである。2区南側の斜面下方では70cmとより厚くなる。
- II 1層：調査区全域に堆積する褐色土で、厚さは15cmである。
- II 2層：2区南側に部分的に堆積する暗褐色土で、厚さは25cmである。
- III 層：2区南側に部分的に堆積するIV層の明黄褐色の岩盤をブロック状に多量に含む黄褐色粘土層で、厚さは20cmである。2区南側の斜面下方の一部では、この層が遺構検出面となっている。
- IV 層：基盤となる岩盤層である。調査区北側の斜面上方から中腹では、この層が遺構検出面となっている。



第4図 層序断面図

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡2棟、溝跡8条、土壤1基、性格不明遺構1基を発見した。遺構検出面は、1区はIV層、2区は北側がIV層、南側がIII層である。

S 1571竪穴住居跡（第5～9図）

【位置】2区西側に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。

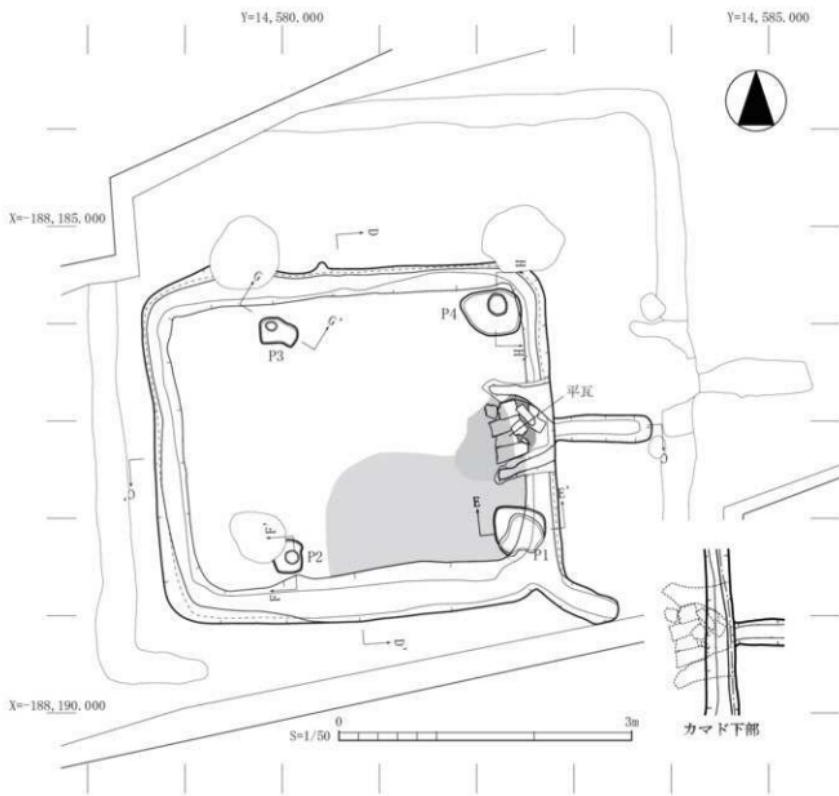
【残存状態】南辺の一部は後世の改変により一部失われているが、それ以外の箇所は良好である。

【重複】S 1565と重複し、それよりも古い。

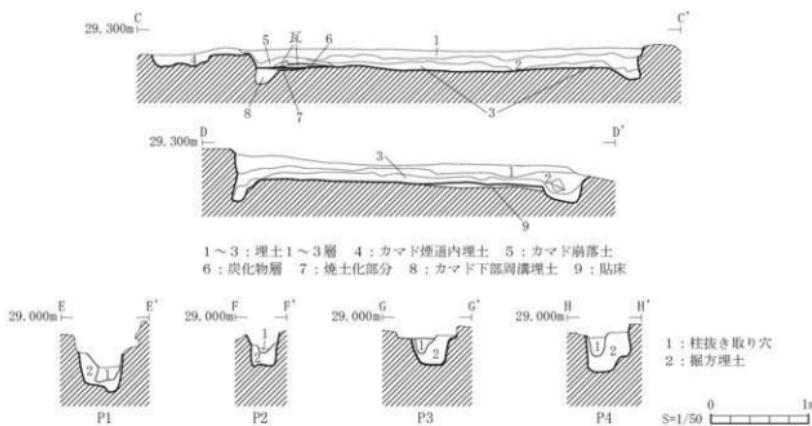
【平面形・方向】平面形は隅丸方形である。方向は西辺でみると北で約5度西に偏している。

【規模】東辺が4.11m、南辺が3.56mである。

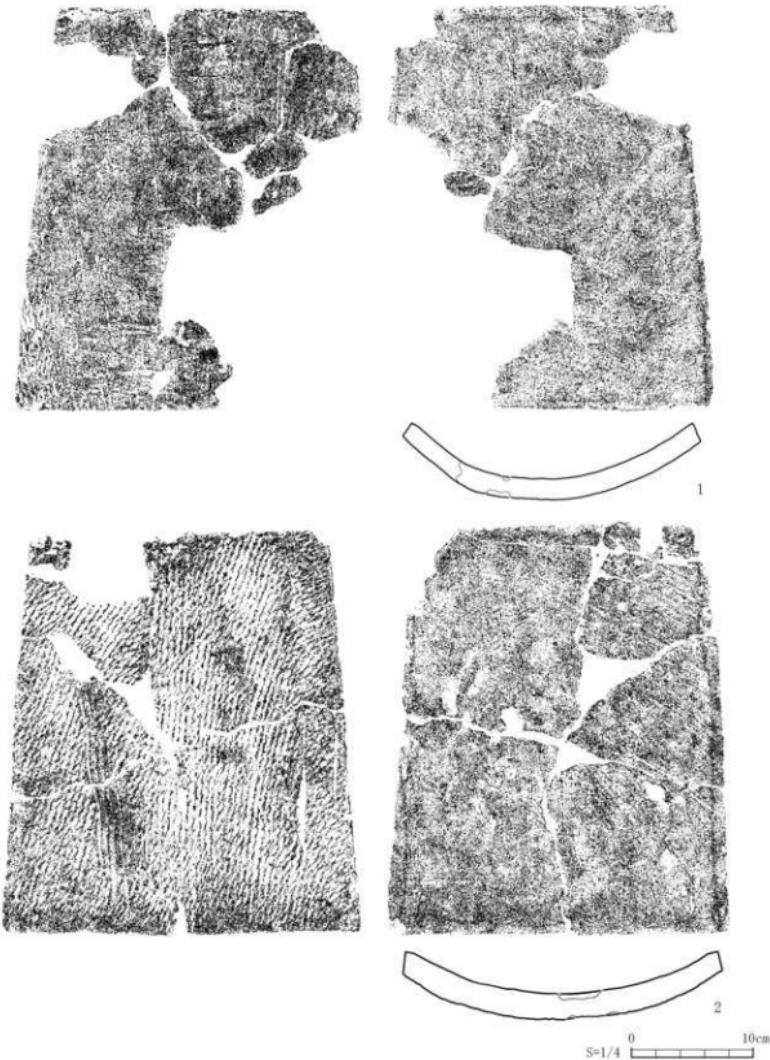
【埋土】1層はIV層の岩盤をブロック状にやや多く含む褐色粘質土である。2層はIV層の岩盤をブロック状に多量に含む暗褐色土、3層はIV層の岩盤を小ブロック状に多く含む褐色粘質土で、周溝にも堆積し



第5図 S I 571 壺穴住居跡平面図

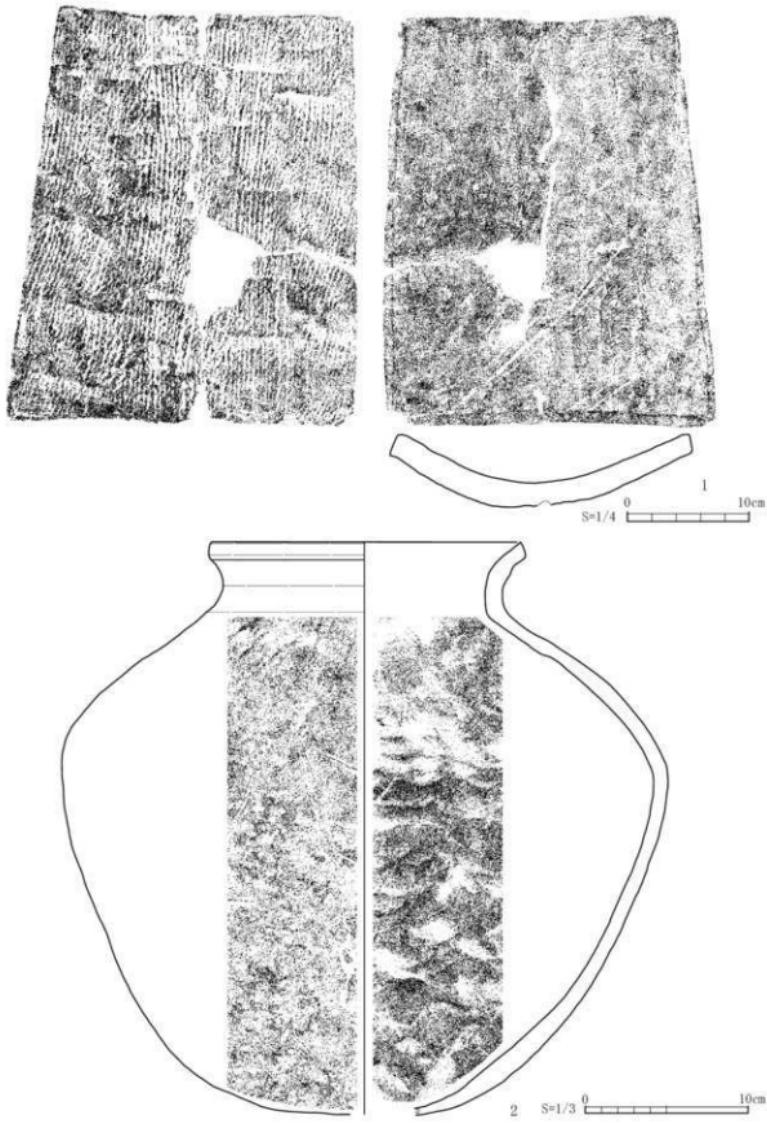


第6図 S I 571 壺穴住居跡断面図



番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真 図版	登録 番号	備考
			凸面	凹面							
1	平瓦	S I 571 カマド火床面	網目き目→ナデ	布目→ナデ	32.9	—	—	1.8	R13	I A類-a	
2	平瓦	S I 571 カマド火床面	網目き目→間型合压痕。一 部に布目	布目→ナデ	33.5	27.8	—	2.2	6-4 R5	II B類-a 1に類似	

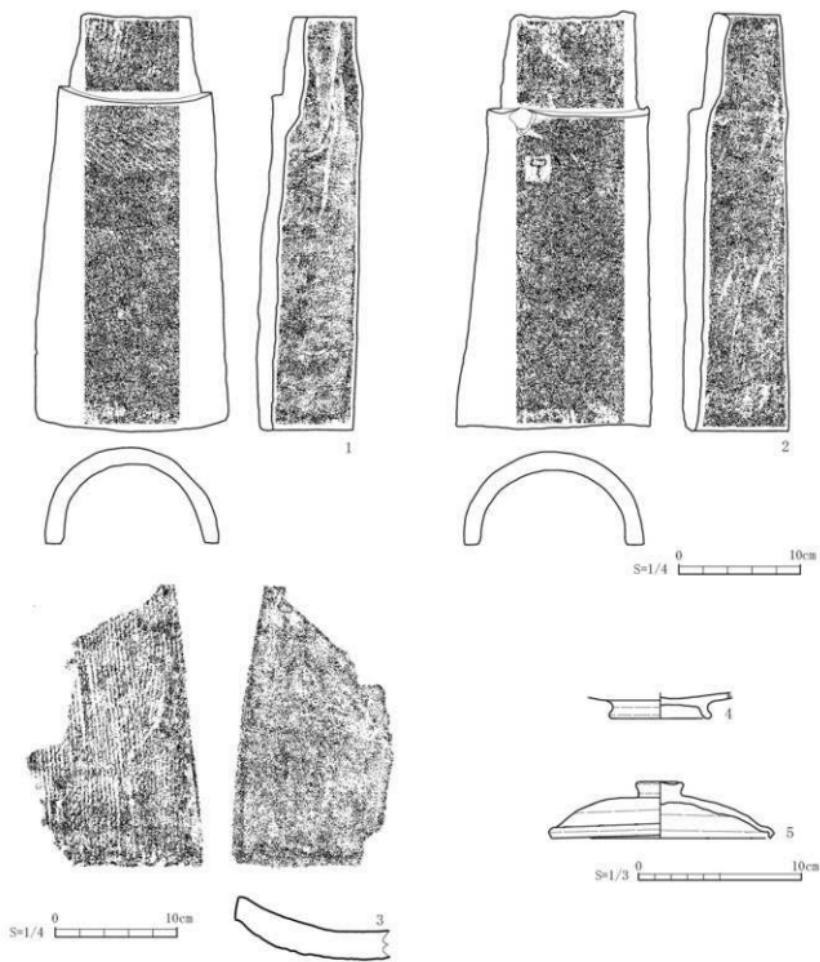
第7図 S I 571 出土遺物 (1)



(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真 図版	登録 番号	備考
			凸面	凹面							
1	平瓦	S I 571 カマド火床面	撻叩き目・凹型台汎痕	布目→ナデ	33.5	26.5	22.4	1.8	7-1・ 2	88	II b 類-a
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考	
2	須恵器 甕	S I 571 P柱抜取り穴	外面	内面	19.0 23/24	10.6 24/24	35.2	6-1・2	R27	ほぼ完形、底部焼成後穿孔	

第8図 S I 571 出土遺物 (2)



(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真 図版	登録 番号	備考
			凸面	凹面							
1	丸瓦	S1571 圓溝理土上部	調印き目→ロクロナデ	布目	33.8	15.4	9.0	1.3	7-3・4	R11	II B類-a
2	丸瓦	S1571 圓溝理土上部	調印き目→ロクロナデ	布目	34.3	16.0	10.0	1.6	8-1・2	R10	II B類-a (占)
3	平瓦	S1571 圓溝理土上部	調印き目→四型台側端部の 仕組	布目→ナデ	-	-	-	2.2		R7	II B類-b
番号	種類	層位	特徴		口径	底径	器高	写真 図版	登録 番号	備考	
			外面	内面							
4	土師器 高台付环	S1571 埋土1層	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色處理	-	6.2 24/24	(1.6)		R33		
5	須恵器 蓋	S1571 埋土2層	ロクロナデ	ロクロナデ	13.4 20/24	-	3.5	6-3	R28		

第9図 S1 571 出土遺物 (3)

ている。これらの埋土は、ブロック混入の状況から、全て人為的な埋め土と考えられる。

【床面の状態】南東側はIV層の岩盤や黒褐色土をブロック状に含む褐色粘土の貼床で、厚さは2~6cmである。それ以外はIV層を平坦にして床としている。

【壁の状態】周溝の底面から床面の高さまでは、約2~4cmほど外側にオーバーハングしており、それより上部では垂直に立ち上がる。壁高は、残存状態が良好な北壁で24cmである。

【柱穴】床上面で主柱穴を4基確認した(P 1~P 4)。住居の平面形に比べてやや東寄りに方形で配置されている。各柱穴の間隔は平均で約2.3m、対角線上は約3.3mである。平面形は不整円形であり、規模は長さ35~63cm、幅20~54cm、深さ31~58cmである。掘方埋土はいずれもIV層の岩盤を小ブロック状に多量に含む黄褐色土である。柱抜取り穴はP 2が柱痕跡の柱のあたり痕跡である。それ以外の柱抜取り穴は掘方を壊しており、その下部は円柱状に窪んで柱痕跡状になる。柱のあたり痕跡の規模は直径14~24cmで、埋土は褐色土である。

【カマド】東辺中央に付設され、煙道・燃焼部・側壁部を確認した。規模は燃焼部最大幅65cm、奥行52cm、残存する側壁高は最大16cmである。燃焼部には平瓦が平坦になるように敷かれ、瓦全体が被熱している。側壁部はIV層の岩盤をブロック状に含む褐色粘質土で構築されており、側壁内側の一部が被熱している。カマド内にのみ堆積する5層は、暗赤褐色の焼土と炭化物とカマド側壁と同質の褐色粘質土をブロック状に多量に含む暗赤褐色土であり、カマド崩落土と考えられる。煙道は長さ100cm、幅30cm、残存する深さは12cmであり、先端ほど深くなる。煙道内埋土の4層は炭化物と暗赤褐色土をブロック状にやや多く含む褐色粘質土である。

【周溝】全周しており、南東隅から外延溝が伸びる。規模は上幅24~52cm、下幅5~30cm、深さ5~12cmであり、北から南にかけて約10cmの比高差で緩やかに傾斜し、南東隅ではさらに5cm程低くなっている。カマド下部では、IV層の岩盤を小ブロック状にやや多く含む褐色土で埋め戻されている。

【遺物】1層からは第9図-4に示した土師器の高台付坏(B類)のほか、土師器坏(A類)・甕(A類)、須恵器坏・甕・瓶・蓋、平瓦(I A類-a・I B類)が出土している。2層からは第9図-5に示した須恵器蓋のほか、土師器坏(A類)・甕(A類)、須恵器瓶が出土している。住居南東側のP 1柱抜取り穴埋土と周溝埋土の上部からは、第9図-1~3に示した丸瓦(II B類-a) 平瓦(II B-b)のほか、土師器甕(A類)・平瓦が出土している。P 4柱抜取り穴埋土からは、第8図-2に示した須恵器甕が斜めに倒立した状況で出土している。床面上からは、須恵器甕、平瓦(I A・II B類-a)が出土している。カマド周辺の埋土からは、土師器甕、須恵器瓶、平瓦が出土している。カマドの燃焼部からは、第7図-1・2、第8図-1に示した平瓦(I A類-a・II B類-a)が出土している。また、貼床埋土からは、土師器甕(A類)が出土している。

S 1565 穫穴住居跡 (第10~12図)

【位置】2区西側に位置する隅丸方形の竪穴住居跡である。

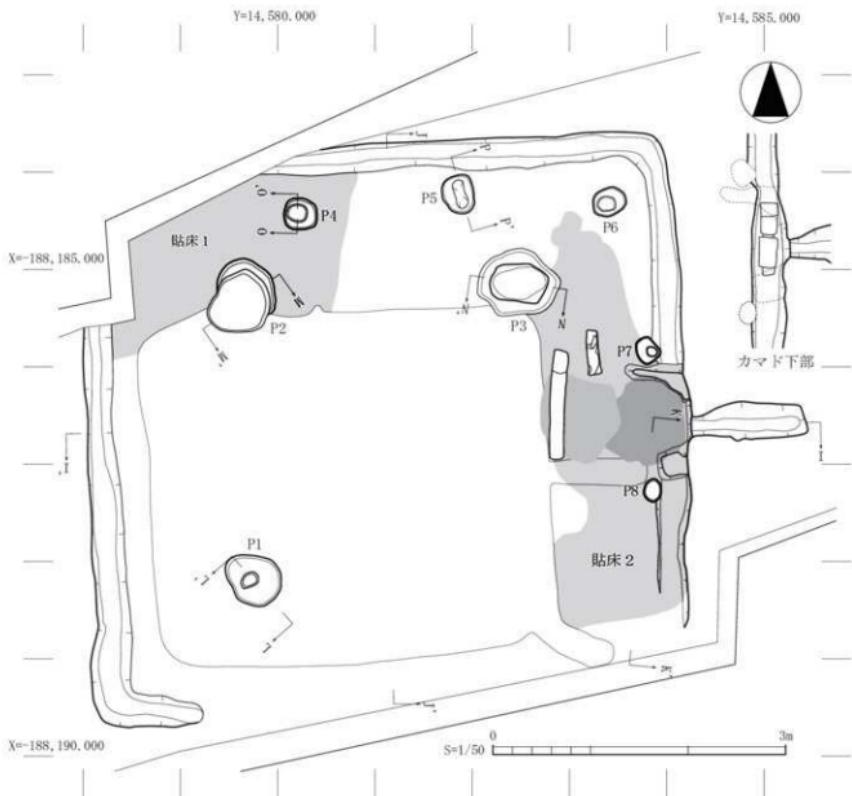
【残存状態】南辺の一部は削平されている。また、北西角は調査区外である。そのほかの箇所では残存状態は良好である。

【重複】S I 571と重複し、それよりも新しい。

【平面形・方向】平面形は隅丸方形である。方向は西辺でみると北で約3度西に偏している。

【規模】東西方向は6.46mであり、南北方向で6.08mと推定される。

【埋土】1層はIV層の岩盤を小ブロック状にやや多く含む明褐色粘土、2層は壁際と周溝に堆積する白色



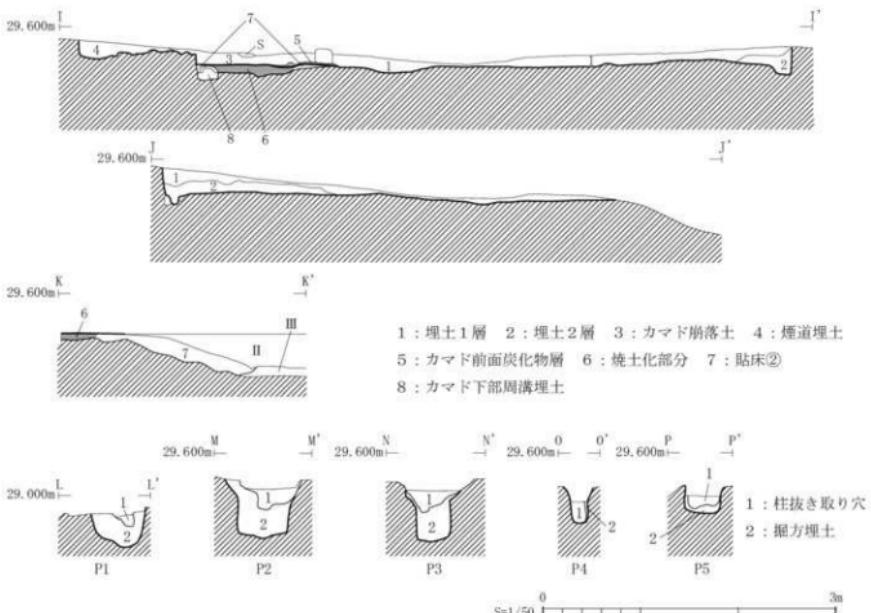
第10図 S 1 565 竪穴住居跡平面図

粒を含む明黄褐色粘土である。

【床面の状態】北西側の貼床1はIV層の岩盤を小ブロック状に多量に含む黄褐色土であり、厚さは1～10cmである。南東側の貼床2は暗褐色土で、厚さは8～16cm以上であり、比高差約40cmの斜面を平坦にするように整地している。そのほかでは、IV層を平坦にして床としている。

【壁の状態】周溝の底面から検出面まで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、残存状態が良好な北壁で26cmである。

【柱穴】床面上で8基確認した(P1～P8)。主柱穴は規模と配置からP1・2・3と考えられる。柱穴の間隔は平均で2.9m、対角線上は4.1mである。平面形はおよそ梢円形であり、規模は長さ約60cm、幅40～52cm、深さ36～62cmである。掘方埋土はIV層の岩盤をブロック状に多量に含む褐色もしくは黄褐色粘質土である。3基とも柱は抜き取られており、柱抜取り穴は、P1は柱痕跡状に、P2とP3は掘



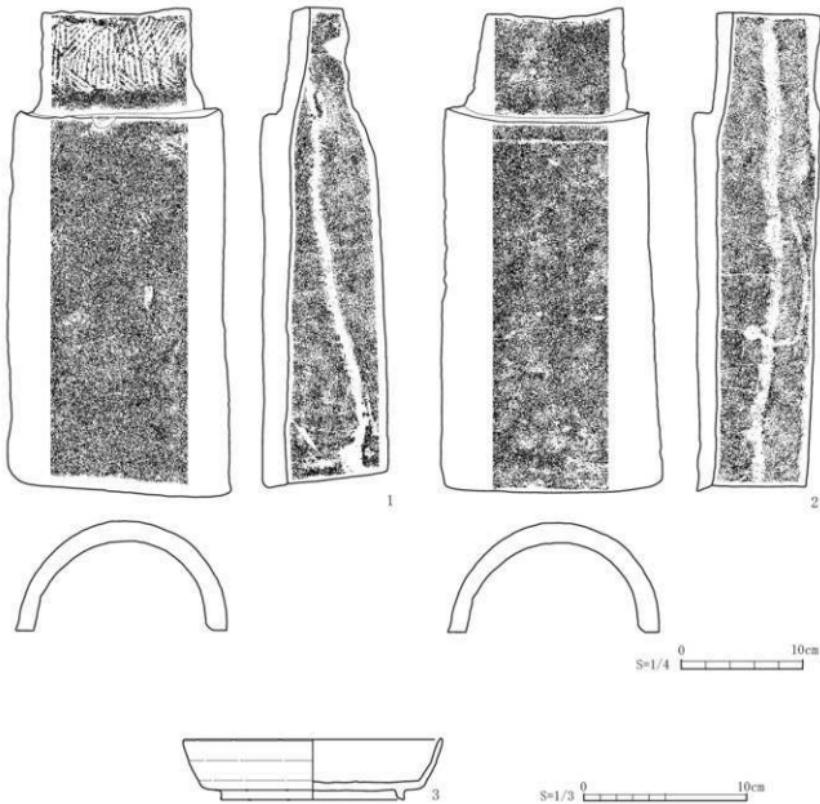
第11図 SI 565 積穴住居断面図

方の上部を大きく壊している。P 2とP 3の柱抜取り穴の下部は直径約12cmの円形状にわずかに窪んでおり、柱のあたり痕跡と考えられる。埋土は白色粒を含む褐色粘質土である。

P 4～P 8は北側と東側の周溝に沿うように配されている。柱穴の間隔は、P 4～P 5間で1.7m、P 5～P 6間で1.5m、P 6～P 7間で1.6m、P 7～P 8間で1.4mである。平面形はおよそ楕円形であり、規模は長さ34～40cm、幅28～32cm、深さ26～38cmである。カマド脇のP 7とP 8は、ほかに比べて小さい。掘方埋土はIV層の岩盤を小ブロック状に含む褐色または黄褐色土である。柱抜取り穴は柱痕跡状に認められ、埋土はIV層の岩盤を小ブロック状に含む褐色粘質土である。

【カマド】 東辺中央に付設され、煙道と燃焼部と側壁部を確認した。規模は燃焼部最大幅90cm、奥行82cm、残存する側壁高は最大16cmである。側壁部はIV層の岩盤をブロック状にやや含む褐色粘土で構築されている。燃焼部は、側壁内側の一部と火床面の貼床が被熱している。カマド内にのみ堆積する3層は、暗赤褐色の焼土と炭化物とカマド側壁と同質のぶい黄褐色土をブロック状に多量に含む灰黄褐色土で、カマド崩落土と考えられる。煙道は長さ1.2m、幅42cm、深さ3～18cmで、先端ほど深くなる。煙道内埋土の4層は焼土と炭化物をブロック状に多量に含む灰黄褐色粘質土である。

【周溝】 東辺、西辺、北辺では良好な状態で残存しており、南辺はほとんど削平されている。規模は上幅24～40cm、下幅10～20cm、深さ27～37cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦で北から南にかけて約30cmの比高差で緩やかに傾斜する。カマド下部の箇所は、暗褐色土で埋め戻したのちに丸瓦を2点伏せ

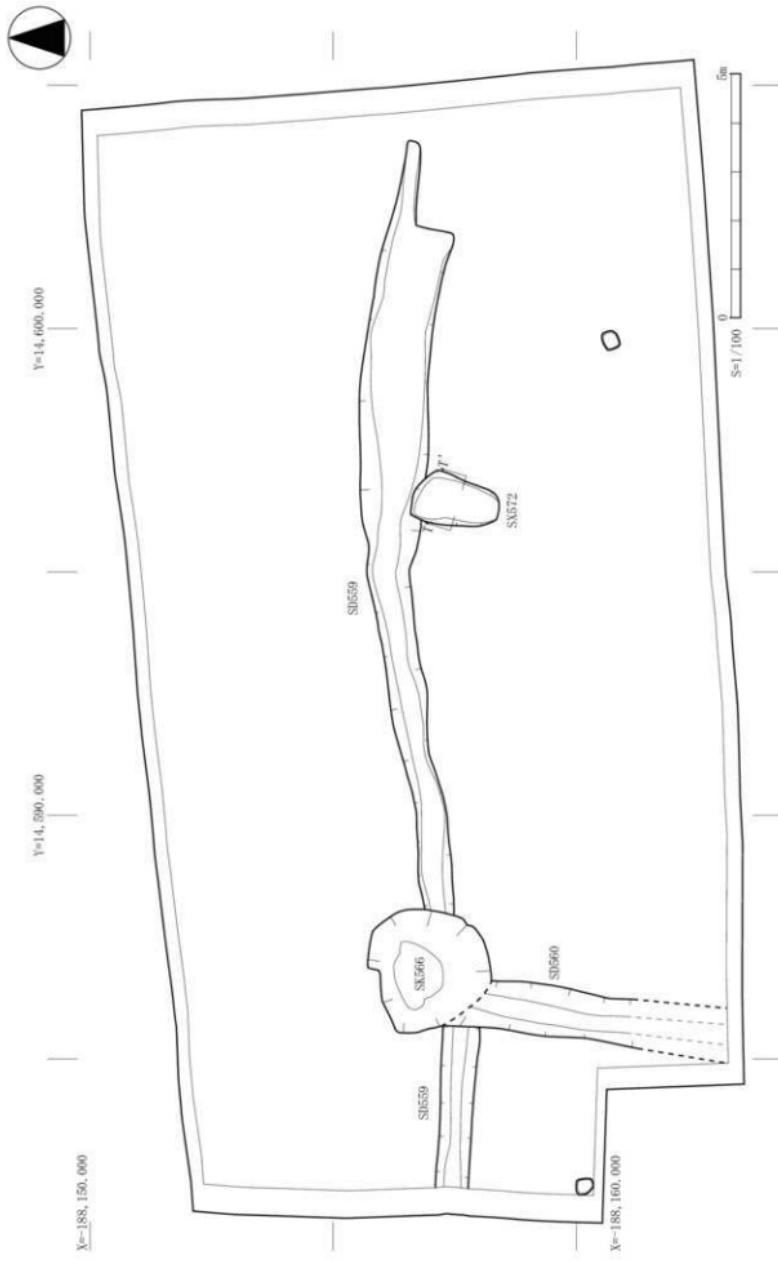


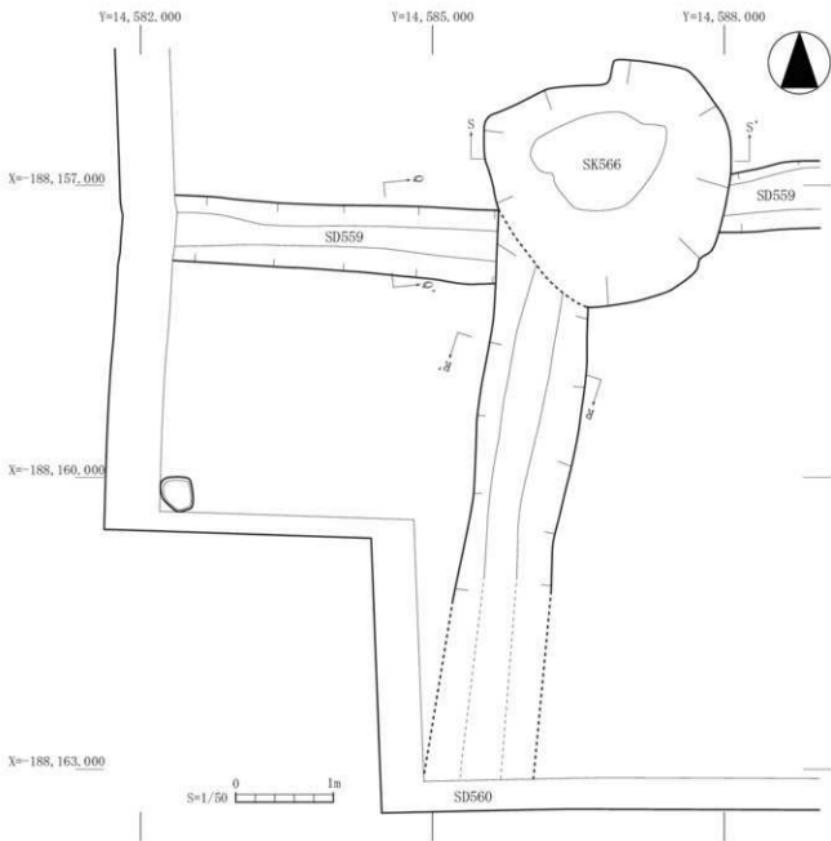
(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	写真 図版	登録 番号	備考
			凸面	凹面							
1	丸瓦	S1565 カマド下周溝上部	格子叩き・矢羽根状叩き→ ロクロナデ	布目	39.2	18.4	—	2.0	8-3・4	R1	II B類-bに類似
2	丸瓦	S1565 カマド下周溝上部	不明→ロクロナデ	布目	39.1	17.8	11.3	1.6	9-1・2	R2	II B類
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考	
3	須恵器	S1565 高台付环 埋土1層	ロクロナデ	ロクロナデ	15.8 11/24	11.2 23/24	3.7		R21		

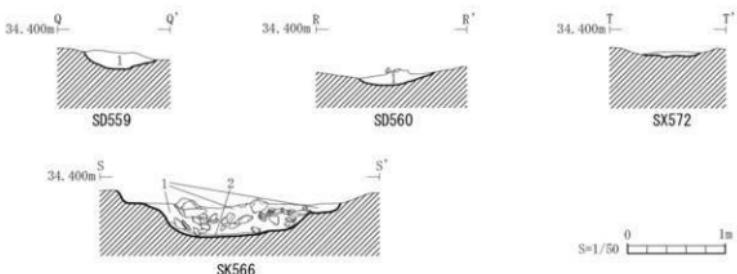
第12図 S.I. 565 出土遺物

第 13 圖 1 区検出遺構平面図





第14図 SD 559・560、SK 566 平面図



第15図 1区検出遺構断面図

て周溝に沿って被せられた暗渠状となっている。

【遺物】1層からは第12図-3に示した須恵器高台付壺のほか土師器壺(A I a・A I b・A III類・B II c・B V類)、甕(A・B類)、須恵器壺(I類)・甕、丸瓦、平瓦(I c類-a)が出土している。2層からは須恵器壺(II類)が出土している。周溝内からは、土師器甕、須恵器瓶、平瓦II B類が出土している。カマド内埋土からは土師器甕B類が出土している。貼床②中からは、土師器壺(A I b・A II a類)、須恵器壺(II類)・甕が出土している。カマド下部の暗渠には、第12図1・2に示した丸瓦(II B b類)が2点並べられている。また、カマド前面の炭化物層の上部には、角柱状製品が置かれていた(写真図版9-3)。

S D559溝跡(第13~15図)

【位置】1区中央に位置するやや蛇行する東西溝跡であり、西側は調査区外に延びる。

【重複】S D560・S K566と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約9度北に偏しており、東半は南に湾曲している。規模は長さ9.1m以上、上幅0.9~1.3m、下幅0.2~1.1m、深さ17cmである。

【埋土】IV層の岩盤をブロック状にやや多く含む褐色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、30cmの比高差で西から東へと緩やかに傾斜する。

【遺物】埋土から土師器壺(B I類)・高台付壺・甕(B類)、須恵器甕が出土している。

S D560溝跡(第14~15図)

【位置】1区西側に位置する南北溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

【重複】S D559・S K566と重複し、S K566よりも古く、S D559よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏している。規模は長さ5.5m以上、上幅0.9~1.1m、下幅30~41cm、深さ13cmである。

【埋土】黄褐色土であり、埋土上部にこぶし大の丸礫が並ぶ。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であり、35cmの比高差で北から南へと傾斜する。

【遺物】出土していない。

S D562溝跡(第16~17図)

【位置】2区中央に位置する蛇行する東西溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【重複】S D563と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は東で約57度北に偏しており、南側は東へと蛇行している。規模は長さ7.8m以上、上幅0.7~1.6m、下幅10~40cm、深さ39cmである。

【埋土】上部はII層が直接堆積している。底面付近に残存する埋土は褐色粘土である。

【壁・底面】南北の比高差最大26cmの斜面を切り通すように掘削されており、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差約80cmで北から南に向かって傾斜する。

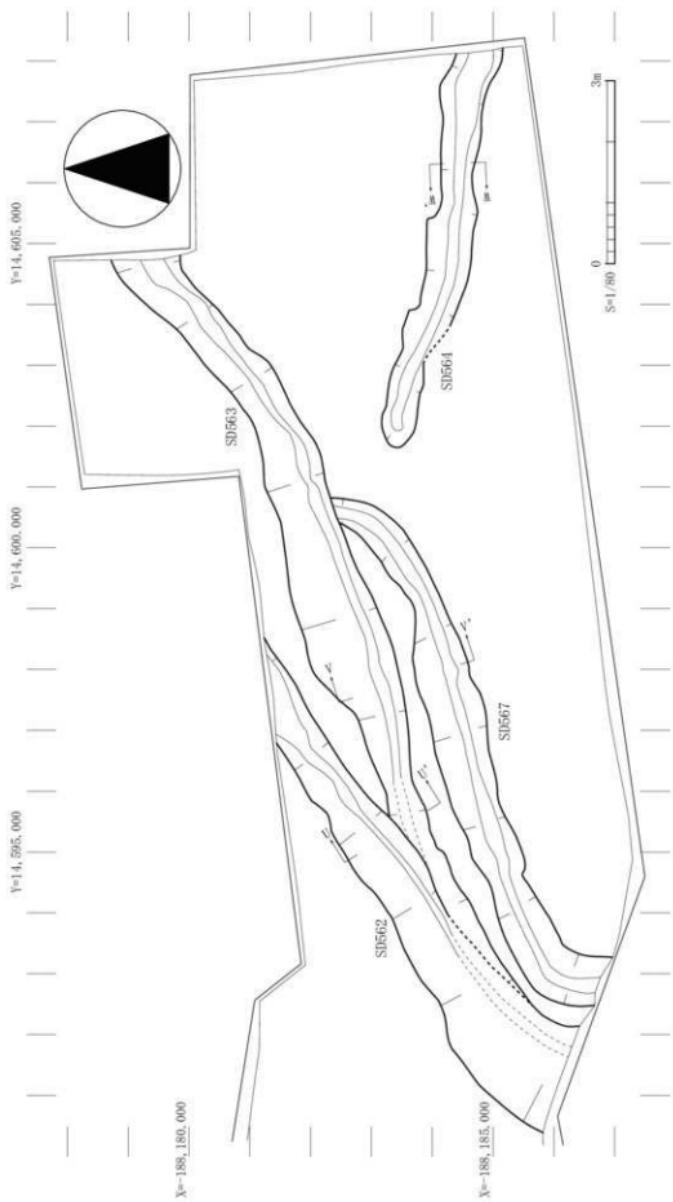
【遺物】出土していない。

S D563溝跡(第16~17図)

【位置】2区東側に位置する蛇行する東西溝跡であり、東側は調査区外に延びる。

【重複】S D562・567と重複し、前者より古く、後者より新しい。

【方向・規模】方向は東で約52度北に偏しており、東側は北へ、西側は南へと蛇行している。規模は長さ



第16図 SD 562・563・564・566・567 平面図

10.9m以上、上幅0.5～1.4m、下幅11～34cm、深さ52cmである。

【埋土】上部はII層が直接堆積している。底面付近に残存する埋土はにぶい黄褐色粘土である。

【壁・底面】南北の比高差最大39cmの斜面を切り通すように掘削されており、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差約60cmで東から西に向かって傾斜している。

【遺物】検出面から土師器壺、須恵器甕、平瓦、陶器の破片が出土している。

S D564溝跡（第16・17図）

【位置】2区東側に位置する東西溝跡であり、東側は調査区外に延びる。

【方向・規模】方向は東で約11度南に偏している。規模は長さ6.6m以上、上幅40～75cm、下幅13～43cm、深さ20cmである。

【埋土】IV層の小躰をブロック状に少量含むオリーブ褐色である。

【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差43cmで西から東に向かって傾斜する。

【遺物】検出面から土師器甕、須恵器甕・瓶、磁器、陶器の破片が出土している。

S D567溝跡（第16・17図）

【位置】2区東側に位置する蛇行する東西溝跡であり、南側は調査区外に延びる。

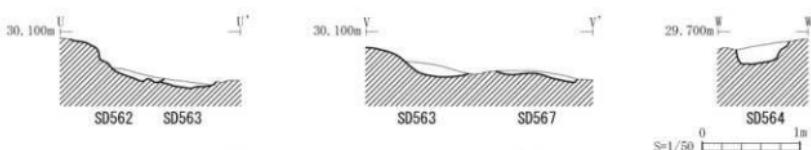
【重複】S D563と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約18度北に偏しており、東側は北側へ、西側は南側へと蛇行している。規模は長さ9.1m以上、上幅46～91cm、下幅13～27cm、深さ16cmである。

【埋土】上部にはII層が直接堆積している。底面付近に残存する埋土はIV層の岩盤をブロック状に多量に含む褐色粘質土であり、人為的な埋め土と考えられる。

【壁・底面】南北の比高差最大10cmの斜面を切り通すように掘削されており、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差約50cmで東から西に向かって傾斜する。

【遺物】検出面から土師器壺、須恵器壺・瓶の破片が出土している。



第17図 S D 562・563・564・567溝跡断面図

S D568溝跡（第18・21図）

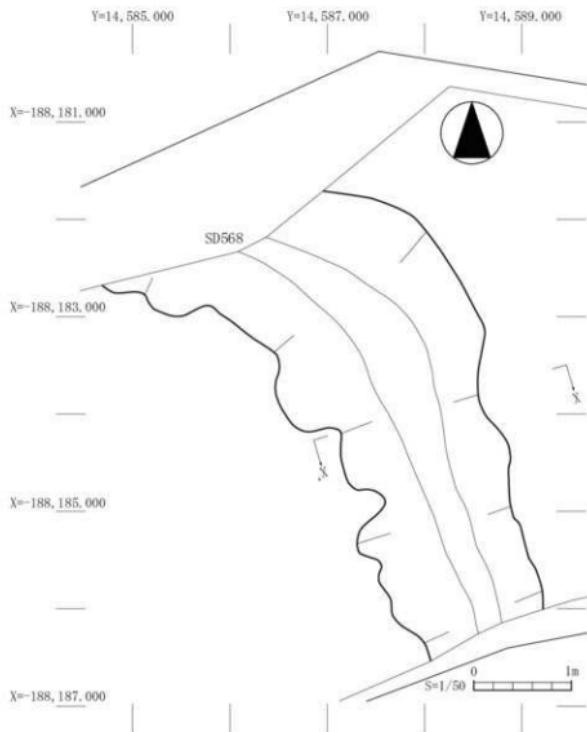
【位置】2区中央に位置する蛇行する南北溝跡であり、北側と南側は調査区外に延びる。

【方向・規模】西に湾曲する形態で、方向は、北半は北で約41度西に偏し、南半は北で約18度西に偏している。規模は長さ4.2m以上、上幅1.4～2.2m、下幅32～65cm、深さ48cmである。

【埋土】黄褐色粘質土であり、下方には砂質土をブロック状に含む。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、比高差18cmで北から南に向かって傾斜している。

【遺物】出土していない。



第18図 SD 568 平面図

SD 569溝跡（第19・21図）

【位置】2区西側に位置する南北溝跡であり、北側は調査区外に延びる。また、南側は確認調査の際に掘り下げたため不明である。

【重複】S 1571と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約7度西に偏している。規模は長さ1.9m以上、上幅16～42cm、下幅5～24cm、深さ48cmである。

【埋土】褐色粘質土である。

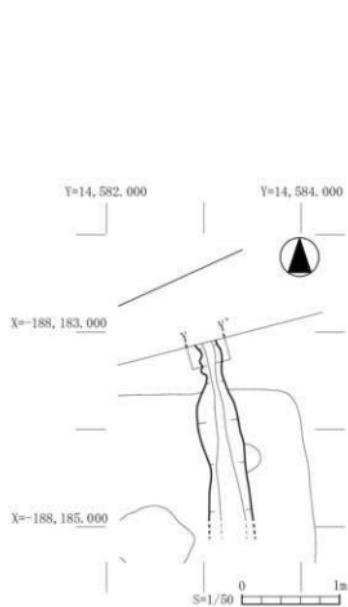
【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦で、北から南に向かって傾斜する。

【遺物】出土していない。

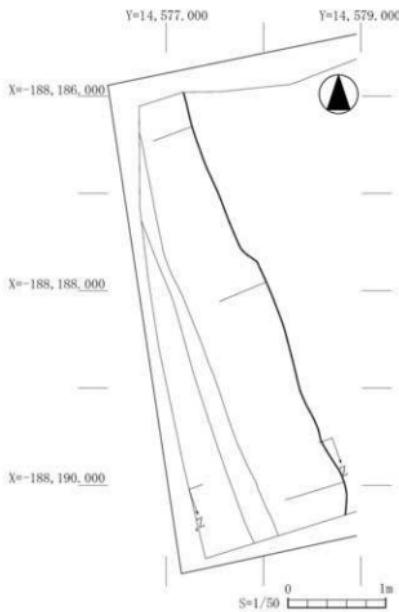
SD 570溝跡（第20・21図）

【位置】2区西端に位置する南北溝跡であり、東辺以外は調査区外である。

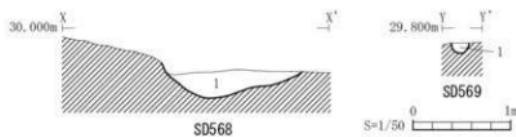
【方向・規模】方向は東辺で測ると北で約21度西に偏している。規模は長さ4.6m以上、上幅1.6m以上、下幅9～26cm、深さ30cmである。



第19図 SD 569溝跡平面図



第20図 SD 570溝跡平面図



第21図 SD 568・569・570溝跡断面図

【埋土】褐色粘質土で、下方は黄褐色土や黒褐色土をやや多く含む。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、底面は平坦であり、比高差約60cmで北から南に向かって傾斜する。

【遺物】埋土から須恵器瓶の破片が出土している。

S K566土壤 (第14・15図)

【位置】1区西側で発見した。

【重複】SD 559・560と重複し、それらよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は不整円形であり、規模は直径2.6m、深さ55cmである。

【埋土】2層に分けることができる。1層は暗褐色土、2層は黄褐色粘土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外反しながら立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】1層から須恵器甕の破片が出土している。

S X572 (第13・15図)

【位置】1区中央に位置する土壤状の浅い落ち込みである。

【重複】SD559と重複し、それよりも新しい。

【平面形・規模】平面形は楕円形であり、規模は南北方向の上幅1.8m、下幅1.7m、東西方向の上幅1.1m、下幅76cm、深さ4cmである。

【埋土】白色粒をやや含む褐色粘質土である。

【壁・底面】壁は非常に緩やかに外傾しながら立ち上がっており、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

堆積層その他の出土遺物

I層から土師器坏・甕・須恵器坏・甕・瓶、瓦、陶磁器の破片が、II層から土師器坏・甕・須恵器坏・甕・瓶、陶磁器の破片が出土している。

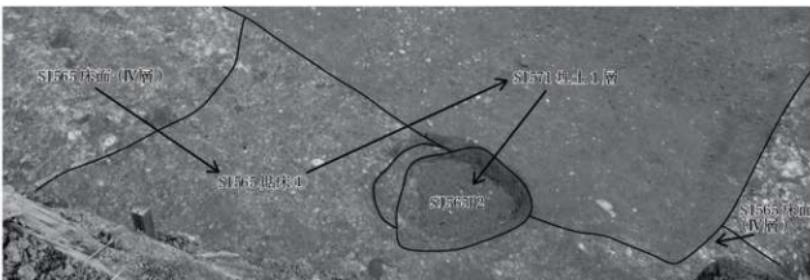
4まとめ

(1) 古代の堅穴住居跡について

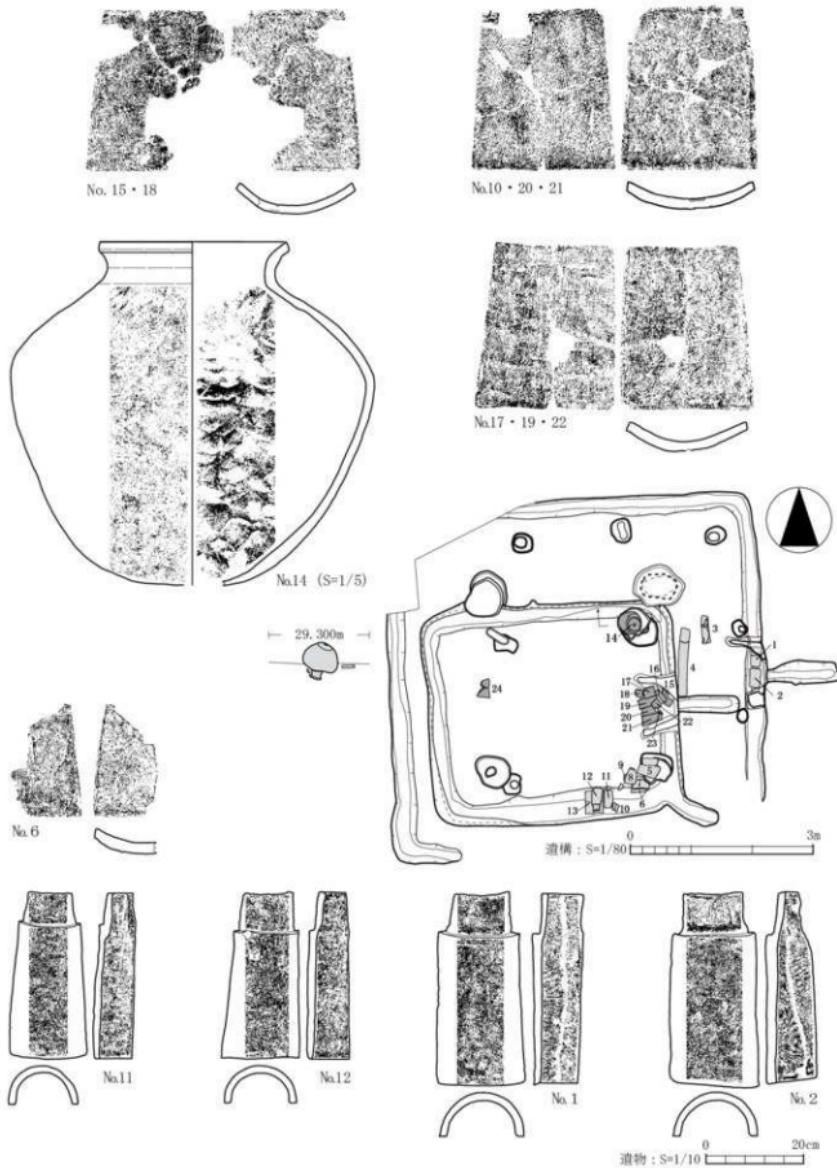
(a) S I 571の廃絶からS I 565の構築まで (第22図)

第22図は、住居北西隅を北西側から撮影した写真である。S I 565床面に貼床①が施されているが、S I 571埋土がそれを切るような状況で検出され、一見するとS I 565→S I 571の新旧関係のようにも見受けられる。一方、これら上面で確認したP2は、位置的にS I 565に伴うものであり、S I 571埋土を掘り込んでいる。したがって、S I 571→S I 565の新旧関係は明らかである。さらに、これらの重複関係から、S I 565床面の構築→S I 565の部分的な貼床→S I 571の埋め戻し→S I 565上屋の構築という経過が復元できる。

このことは、S I 571が完全に埋没する前にS I 565の床面が構築されていたことを示している。一度埋め戻したS I 571を再度掘り下げることなく、S I 571が開口している状態で壁を押し広げて、合理的にS I 565を構築したことが想定できる。よって、S I 571の廃絶からS I 565の構築が連続的であったと言える。



第22図 S I 565・571 北西隅の構築手順



第23図 S.I. 565・571 積穴住居跡遺物出土状況

(b) 遺物の出土状態(第23図)

① カマドに用いられた瓦

S I 571のNo.15～23は、カマドの燃焼部に敷かれていた平瓦である。No.20とNo.21は同一個体であるが、半分に割られて側端部が接するように配置されており、火床面が意図的に平坦になるよう処置されている。また、No.20・21とNo.10は接合しており、両者は色調の差が顕著である。

S I 571のカマド下部には周溝が暗渠状にめぐらしている。本調査区の基盤層は岩盤であるため、透水性が悪いことから、カマド下部の周溝は、岩盤以外の土で埋めることにより水分を土に浸みこませて通していたと考えられる。平瓦は、カマド下部の周溝から浸み上がってくる水分を防ぐために、燃焼部の火床面として据えられた可能性がある。

S I 565のNo.1と2は、カマド下部の周溝上に凸面を上に向けて直列で配置されていた丸瓦である。丸瓦の凹面には周溝の埋土が充填されており、密閉されている。S I 571と同様の理由によりカマド下部の周溝を暗渠状にしていたと考えられ、丸瓦は周溝から浸み上がってくる水分により燃焼部が湿ることを防止するための蓋であった可能性がある。

② S I 571出土遺物について

No.5～7、9～13の瓦は、住居南東部の周溝やP 1柱抜取り穴の埋土上に置かれていた丸瓦と平瓦である。周溝の埋土がP 1、P 3の柱抜取り穴の埋土を覆っていたことから、周溝は主柱穴が抜き取られた後に埋められたと判断できる。よって、これらの遺物は住居の上屋を取り壊した後に置かれたものである。

これらの遺物の構成は、平瓦5点、丸瓦2点である。本調査区では、瓦は堅穴住居跡のカマドのみで使用されており、特に丸瓦はS I 565のカマド下部暗渠のみで使用されている。また、(a)で検討したとおり、S I 565構築段階でS I 571は埋めきっていないと言えることから、抜取り穴と周溝を埋めて平坦にしたS I 571が、S I 565を構築するにあたり作業スペースとして利用されていたことは十分に有り得る。これらの出土状況が、S I 565カマド構築部材の余剰分として単に廃棄されたものなのか、足場安定などのために意図的に配置されたものは不明である。しかし、平瓦と丸瓦が出土している点を、S I 565のカマド構築の際にS I 571と同様に平瓦を敷くか、周溝に丸瓦で蓋をするか模索するために用意された可能性を想定し、これらの瓦をS I 565カマドの構築部材と考える。

No.14はP 4の柱抜取り穴から倒立の斜位で出土した甕である。口縁部が若干割れていますが、ほぼ完形であり、空洞の内部には底部に穿孔された孔から入った土がわずかに沈殿していた。この甕は、S I 565床面には露出していないことから、S I 565の附属施設として機能していたとは考えにくい。このことから、No.14の甕は柱抜取り穴に廃棄された可能性がある。

(c) 小結(第24図)

S I 571の構築からS I 565の拡張に至る過程を第24図に模式的に示した。上記の検討結果をもとにすると、雨水対策をしながら作業の簡便化を図って合理的に住居を構築・拡張していた状況が伺える。本調査区内は、比高差約4mの急な南斜面であり、堅穴住居跡は最も標高が低い地点に位置している。雨天時には最も雨水が集中する場所であるため、十分な雨水対策が必要だったのだろう。

こうした観点から、S I 565の南東隅に柱穴が検出されなかった理由も推測することができる。S I 565貼床2は、比高差40cmで北から南へと傾斜する浅い溝状の落ち込みを掘り、それを埋め戻して平坦な床面を作り出している。貼床2は、この落ち込みの傾斜面を利用して、標高の低い南へと水分を浸み込ませな



① S 1571 の構築と居住



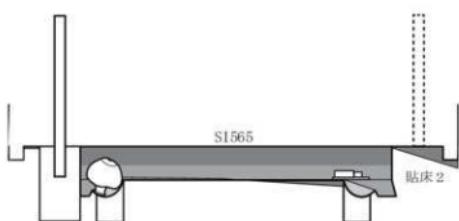
② S 1571 の柱抜取りと上屋解体



- ③ 1 S 1571 の柱抜取り穴と周溝の埋め戻し
- ③ 2 S 1571 壁の拡張
→ S 1565 壁・床面の構築と貼床



④ S 1571 の埋め戻し



⑤ S 1565 の上屋構築・居住

第 24 図 S 1565・571 の構築手順模式図

がら通すことを目的とした貼床の可能性がある。この場合、貼床2の場所に柱穴を掘って柱を立てると、浸みこんだ水分が柱穴にまで及び、柱の根元が腐食する可能性がある。こうした状況を回避するために、柱穴を掘らない何らかの方法で柱を立てていた可能性がある。

(2) 遺構の時期について

(a) 壁穴住居跡の時期について

①出土遺物の帰属について

上記の検討をもとにして、住居の構築から廃絶に至る過程と遺物の帰属の状況を第25図に示す。S I 571の構築時期を示すのはカマドに敷かれたNo.15～23平瓦である。No.14須恵器甕は、残存状態が極めて良好なことから、住居の機能時に使用され廃絶時に廃棄されたと考えられる。S I 571の廃絶時期及びS I 565の構築時期を示すのは、S I 565のカマド構築部材であり、S I 571に廃棄されたNo.1・2・5～13の丸瓦・平瓦である。埋土出土遺物は、両遺構とも遺構外からの混入が想定できるが、S I 571に関しては短期間で人為的に埋め戻されていることから、ある程度時期を反映している可能性があるだろう。

S I 571			S I 565		
構築	機能	廃絶	構築	機能	廃絶
部材	No.15～23			No.1・2	
使用	No.14		No.5～13		No.3・4
廃棄		No.5～14			
混入		埋土出土遺物			埋土出土遺物

第25図 住居の構築過程と出土遺物の関係

②出土遺物について

・No.15～23平瓦

No.15・18平瓦(第7図-1)の凹面の痕跡は布目→ナデ、凸面の痕跡は繩叩き目→布目→ナデであり、I A類-aタイプに比定できることから、政府第Ⅰ期に位置づけられる。No.10・20・21平瓦(第7図-2)の凹面の痕跡は布目→ナデ、凸面の痕跡は瓦の長軸に平行と斜行する繩叩き目→凹型台圧痕と部分的な布目であり、製作技法としてはII B類-a1タイプに類する。凸面にも布目が認められるものは政府第Ⅱ期瓦の生産地とされている仙台市橋江遺跡から出土しているため(仙台市教育委員会1980)、政府第Ⅱ期の瓦と推定できる。No.17・19・22平瓦(第8図-1)の凹面の痕跡は布目→ナデ、凸面の痕跡は瓦の長軸に平行する繩叩き目→叩き目のつぶれであり、II B類-a2タイプに比定できる。

・No.1・2・5～7・9～13瓦

No.6平瓦(第9図-3)は凸面に凹型台側端部の圧痕が見られ、II B類-bタイプに比定できることから政府第Ⅲ期に位置づけられる。No.12丸瓦(第9図-2)はII B類-aタイプで、凸面に凸の刻印が押印されていることから政府第Ⅱ期の瓦と考えられる。No.2丸瓦(第12図-1)はII B類-bタイプに類し、玉縁に矢羽根状の叩き目が見られ、政府第Ⅰ期の瓦と推定する。

・ S I 571埋土出土遺物

壺類の破片数については、1層は土師器：須恵器が15：3、2層は4：0と土師器が多数を占める。土師器壺の中で明確にB類と判断できるものは、1層から出土した第9図-5の高台付壺の1点のみであり、そのほかは、器厚が厚くA類と推定される。

③時期について

S I 571の構築時期は、カマド燃焼部に政庁第II期瓦が使用されていることから、8世紀中葉以降と言える。また、住居の廃絶時期は、廃絶直後に人为的に埋められた1層から土師器壺B類が出土していることや、周溝上部にS I 565構築部材の政庁第III期瓦が残されていることから、8世紀後葉以降に埋められたと推定できる。一方、1層出土の土師器壺はA類が主体的であり、790年以前の8世紀後葉と位置づけられている市川橋遺跡SD1184やSX1351出土遺物の傾向に類似している(多賀城市教育委員会2003)。また、S I 565出土遺物も含めて須恵器壺V類が出土していないことも特徴のひとつとして指摘できるだろう。これらのことから、S I 571は8世紀中葉以降に構築され、後葉頃には埋め戻されたと考える。S I 565は、(1)の検討からS I 571の廃絶直後に構築され、機能していたと考える。

(b) その他の遺構について

S D 559は埋土中から土師器壺B II類や土師器壺B類が出土していることから、8世紀後葉以降の年代が考えられる。それ以外の遺構については、出土遺物は古代のものが主体であるが、ほとんどが破片であるため詳細な年代は不明である(註)。

参考文献

仙台市教育委員会『仙江遺跡発掘調査報告書—造瓦所の調査—』仙台市文化財調査報告書第18集 1980

多賀城市教育委員会『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II—』多賀城市文化財調査報告書第70集
2003

宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡本文編』多賀城市史別巻3 1984

宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡図録編』多賀城市史別巻2 1985

註：これらの溝跡については、II層が上部を覆っているものが多い。斜面に構築されているが故に埋土が流出したことが要因と考えられるため、検出面出土遺物は遺構の年代を直接反映していないと判断した。





S 1571カマド（西より）



S 1571南東側遺物出土状況
(北西より)



S 1571北東側遺物出土状況
(南西より)



S 1565検出状況（北西より）



S 1565カマド検出状況
(西より)



S 1565掘り下げ状況
(北西より)



S 1565カマド（北西より）



S 1565カマド断ち割り状況
(西より)



S D559検出状況
(西より)



S D560、S K566検出状況
(南東より)



S K566断面 (南より)



S D562・563・564・567検出状況
(西より)



1 須恵器・壺(S 1571P 4柱抜取り穴出土) R27



2 須恵器・壺(S 1571P 4柱抜取り穴出土) R27



3 須恵器・蓋(S 1571 2層出土) R28

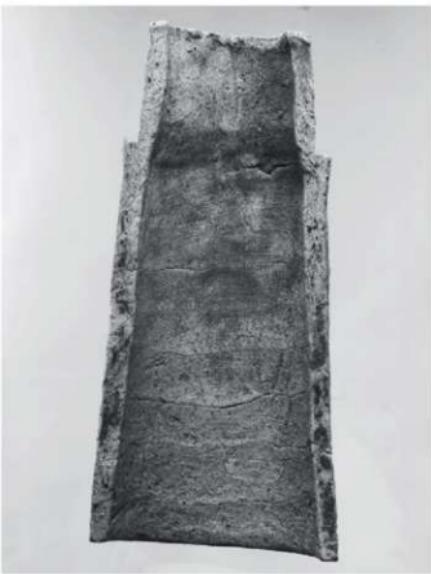


4 平瓦(S 1571カマド火床面出土) R 5





1 丸瓦・凸面(S 1571周溝埋土上部出土) R10



2 丸瓦・凹面(S 1571周溝埋土上部出土) R10



3 丸瓦・凸面(S 1565カマド下部出土) R 1



4 丸瓦・凹面(S 1565カマド下部出土) R 1



1 丸瓦・凸面(S 1565カマド下部出土) R 2



2 丸瓦・凹面(S 1565カマド下部出土) R 2



3 角柱状製品(S 1565カマド前面出土)

III 山王遺跡第139次調査

1 遺跡の概要

山王遺跡は標高3~4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまでの調査で弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期~後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡が多数発見されている。

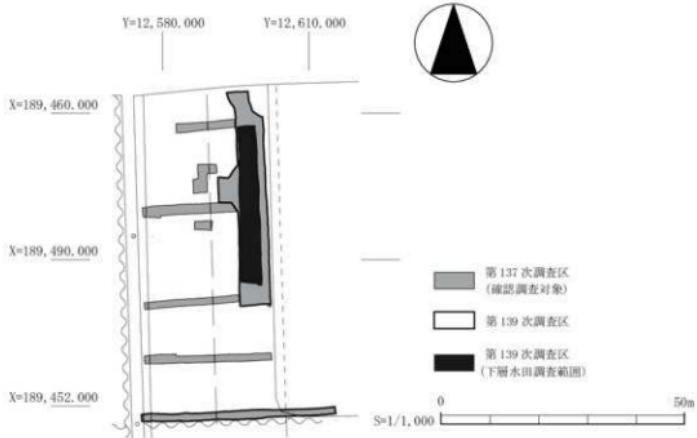
2 調査に至る経緯と経過

本件は、宅地造成計画に伴う本発掘調査である。平成25年4月5日に地権者より当該地区における宅

地造成計画と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、開発の対象面積が約2,500m²と広範囲で、また、側溝を伴う南北道路内に排水管敷設のための掘削が1.5~2.5m、擁壁設置の掘削が1.1mであった。周辺地区的調査では、遺構検出面までの深さが約20cmのため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、事前に遺構の分布状況・遺構検出面までの深さを把握する目的で、確認調査



第1図 調査区位置図



第2図 第139次調査範囲

(第137次調査)を実施し、本発掘調査に係る協議を行うこととなった。

調査については、11月13日より第137次調査として開始し、現代の水田耕作土直下で、古代の遺構面(IV層)を検出し、ほぼ全域にわたり溝跡や土壤を発見した。さらにこの下層の90cm下で水田耕作土と見られる黒色土壤を確認した。この調査成果をもとに地権者と本発掘調査について協議を行った結果、17日から第137次調査に引き続いて第139次調査として実施することとなった。調査は遺構を発見した7箇所の内、掘削が及ぶ1区(道路部分)と2区(擁壁部分)について行った。検出遺構については、新旧関係を確認しながら埋土を掘り下げた。年末・年始の休みのため、20日から調査を中断し、翌年1月8日に再開した。掘り下げた遺構は順次写真撮影を行い、平面・断面図を作成した。18日には全景写真を撮影し、この面での調査を終了した。1月21日より下層の調査に入り、重機を使用して堆積土を除去した。翌日より遺構検出作業に入り、VI層を耕作土とする水田跡を調査区全域で確認した。23日には畦畔検出状況の写真撮影を行う。その後、水田跡を覆っている堆積土を掘り下げ、田面を検出した。24日、写真撮影後、平面図作成のための基準点を設定し、平面図作成に取り掛かる。30日には土層断面図の作成及び註記、平面図の作成を終えた。31日、重機を使用して埋め戻し作業を行って、野外調査を終了した。

3 調査成果

(1) 層序

調査区内の層序は、以下のとおりである。なお、2区の東、南側で厚さ20~70cmの盛土が堆積する。

I 層：調査区全域で確認した黒褐色粘土で、厚さは20cm前後である。現代の水田耕作土である。

II 1層：2区の中央部を除く東・西側で確認した。厚さは2~4cmで、酸化鉄を多く含んだ黒褐色土である。

II 2層：2区の西半部で確認した。厚さ2~8cmで、砂や酸化鉄を含んだ固くしまった黒色粘土である。

III 層：2区の西半部で確認した。厚さ2~13cmで、灰白色火山灰層を層状もしくはブロック状に混入した暗オリーブ褐色土である。溝跡の一部は本層に覆われている。

IV 層：砂を含んだ黄褐色粘土で、厚さは20~30cmである。古代の遺構検出面となっている。

V 1層：調査区東側に堆積する酸化鉄を含んだ灰オリーブ粘土で、厚さは2~10cmである。

V 2層：酸化鉄を含んだ黄褐色粘土で、厚さは35~45cmである。

V 3層：灰オリーブ砂で、厚さは5~13cmである。粒子は細かくしまっている。

V 4層：黒褐色粘土で、厚さは7~18cmである。粒子は細かくしまっている。

V 5層：灰オリーブ砂で、厚さ2~14cmである。

V 6層：オリーブ黒色粘土で、厚さは9~23cmである。

VI 層：起伏のある黒色粘土で、厚さは6~21cmである。古墳時代前期の水田耕作土である。

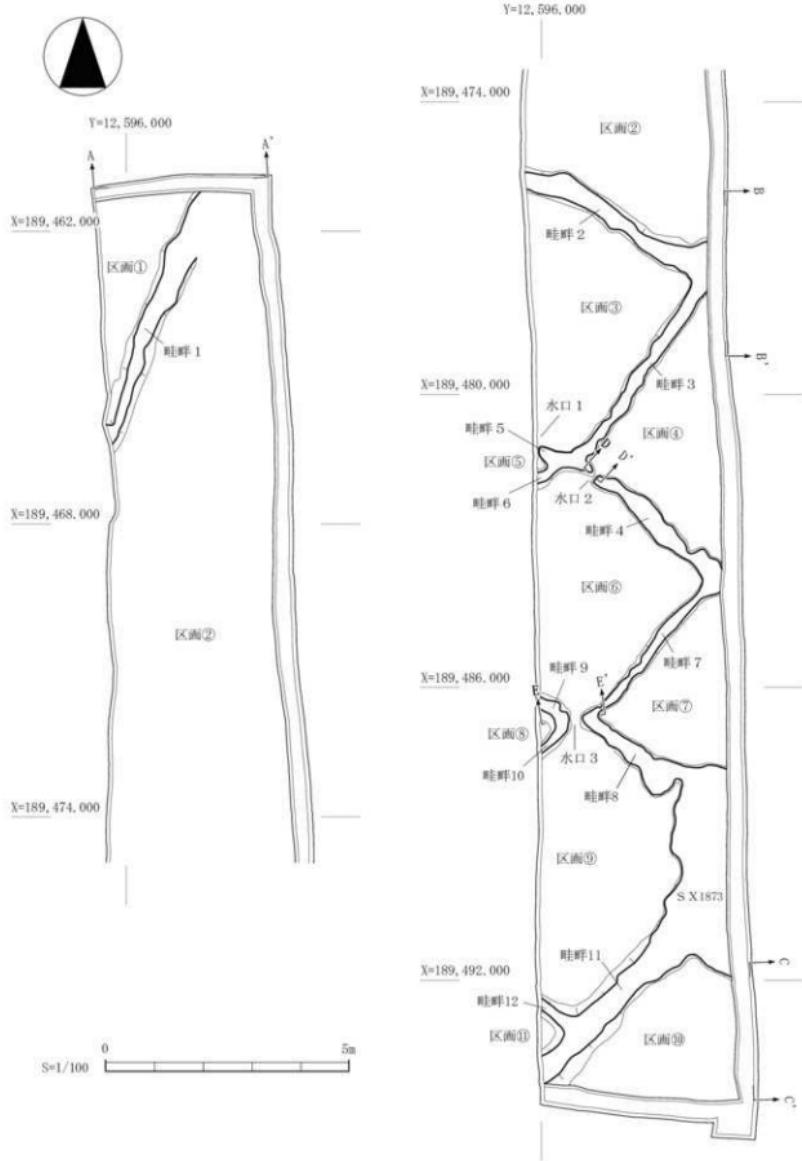
VII 層：凝灰岩ブロックが層状に堆積する灰オリーブ土で、厚さは3~5cmである。

VIII 層：粒子の粗い砂を主体とした黒色土で、厚さは10~20cmである。

IX 層：粒子の粗い砂を主体とした灰色土で、今回の調査で確認した最下層ある。

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、VI層で古墳時代前期の水田跡を確認し、IV層上面で溝跡、土壤などを発見した。



第3図 S X 1872 水田跡平面図

VI層発見遺構

S X1872水田跡（第3～6図）

【水田域】VI層を耕作土とする水田跡を1区全域で確認した。

【検出状況】V層を掘り下げて行く過程で畦畔12条、水口3箇所を検出した。

【水田の区画と耕作土】畦畔によって区画される水田11区画（区画①～⑩）を確認した。いずれも平面形は方形を基調としている。このうち区画⑥は、東西・南北の規模がおよそ明らかである。南北約3.8m、東西約3.7mの略正方形で、面積は約14m²と想定される。そのほか、南北の規模が明らかなものは区画③があり、長さ約4.4mである。東西の規模が明らかなものは区画②・⑨があり、前者が約8m、後者が約3.7mである。なお、区画②では畦畔が南北約8mにわたり検出されず、南北方向に広い区画となっている。この一帯については、元々畦畔がなかったか、あるいは残存状況が悪く検出できなかつた可能性がある（註1）耕作土は黒色粘土で、厚さは6～21cmである。下面には耕作時の痕跡と考えられる著しい土層の乱れが認められる。

【畦畔の規模と方向】12条検出した（畦畔1～12）。いずれも土盛り畦畔である。残存する規模は上端幅6～96cm、高さ2～11cmである。このうち幅及び高さから、畦畔1・11が本水田の基軸となる可能性がある。方向は南北方向のものが北で42°～46度東に偏しており、東西方向のものは東で28°～42度南に偏している。北端の区画①と南端の区画⑩の比高差を見ると、区画⑩が9cm低くなっている、北から南に緩やかに傾斜している。

【水口】区画③南東隅（水口1）、区画④南西隅（水口2）、区画⑥南隅（水口3）の3箇所で発見した。規模を確認できたのは水口2・3であり、水口2は上幅約15cm、深さ4cm、水口3は上幅約32cm、深さ6cmである。水口1・3の底面は北から南に傾斜している。

【遺物】区画④耕作土から、非クロコロ調整の土器類小型壺（第6図）が出土した。

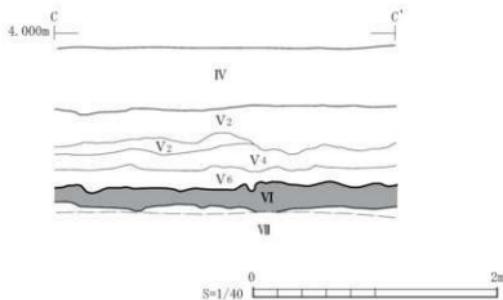
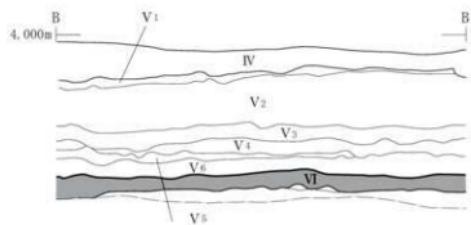
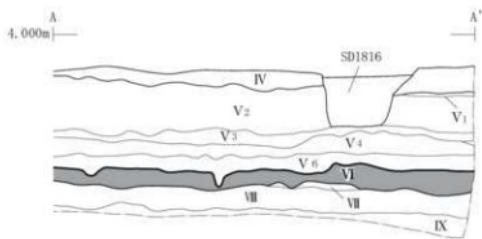
表1 畦畔計測値

番号	検出長	方向	上端幅(cm)		下端幅(cm)		水田面からの比高差(cm)
			最小	最大	最小	最大	
1	5.7m以上	N-42° 27' -E	16	65	47	77	2～11
2	4.1m以上	E-28° 52' -S	20	51	41	68	—
3	4.9m以上	N-43° 08' -E	12	31	22	38	2～6
4	3.7m	E-42° 09' -S	15	42	23	52	3～4
5	0.6m以上	—	20	33	22	35	4～5
6	0.8m以上	—	17	20	31	40	5～6
7	4.4m	N-46° 06' -E	6	26	16	28	5～8
8	2.8m以上	E-30° 16' -S	24	73	30	85	2～4
9	0.6m以上	—	20	28	50	51	4～6
10	0.8m以上	—	12	27	26	45	4～6
11	3.8m以上	N-45° 05' -E	37	96	70	105	3～10
12	0.8m以上	—	20	30	35	70	8～9

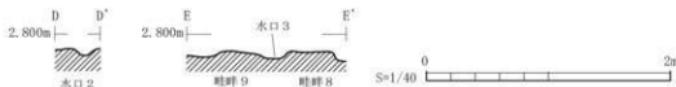
註1：区画②については、田面の調査時に若干掘り下げてしまったため、厳密な意味での標高値を計測することができなかつた。このため、表2「水田面の標高値と傾斜」には記載していない。

表2 水田面の標高値と傾斜

	北側	南側	平均		北側	南側	平均
区画①	2.66m	2.65m	2.66m	区画⑦	2.58m	2.59m	2.59m
区画②	—	—	—	区画⑧	—	—	—
区画③	2.62m	2.66m	2.64m	区画⑨	2.59m	2.60m	2.60m
区画④	2.61m	2.60m	2.61m	区画⑩	2.58m	2.57m	2.58m
区画⑤	—	—	—	区画⑪	—	—	—
区画⑥	2.62m	2.60m	2.61m				



第4図 1区北・東壁断面図



第5図 水口2・3断面図



(単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径 現存率	底径 現存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・壺	区画④ VI層	ヨコナデ後瓶方向へラミガキ・ 体部下半部へラケズリ	ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ・ ヘラケズリ・ハケメ後ヘラミガキ	(10.0) 8/24	(4.9) 12/24	11.0	5-1	R5	非クロクロ

第6図 S X 1872 水田跡出土遺物

S X 1873 (第3図)

【位置・形態】1区南端で発見したVI層を盛って造った方形の高まりである。S X 1872水田跡の畔畦8・11と接続する。

【規模】南北4.2m以上、東西1.6m以上であり、調査区東側にさらに広がっている。

【遺物】出土していない。

IV層上面発見遺構

S D 1816溝跡 (第7～12・20図)

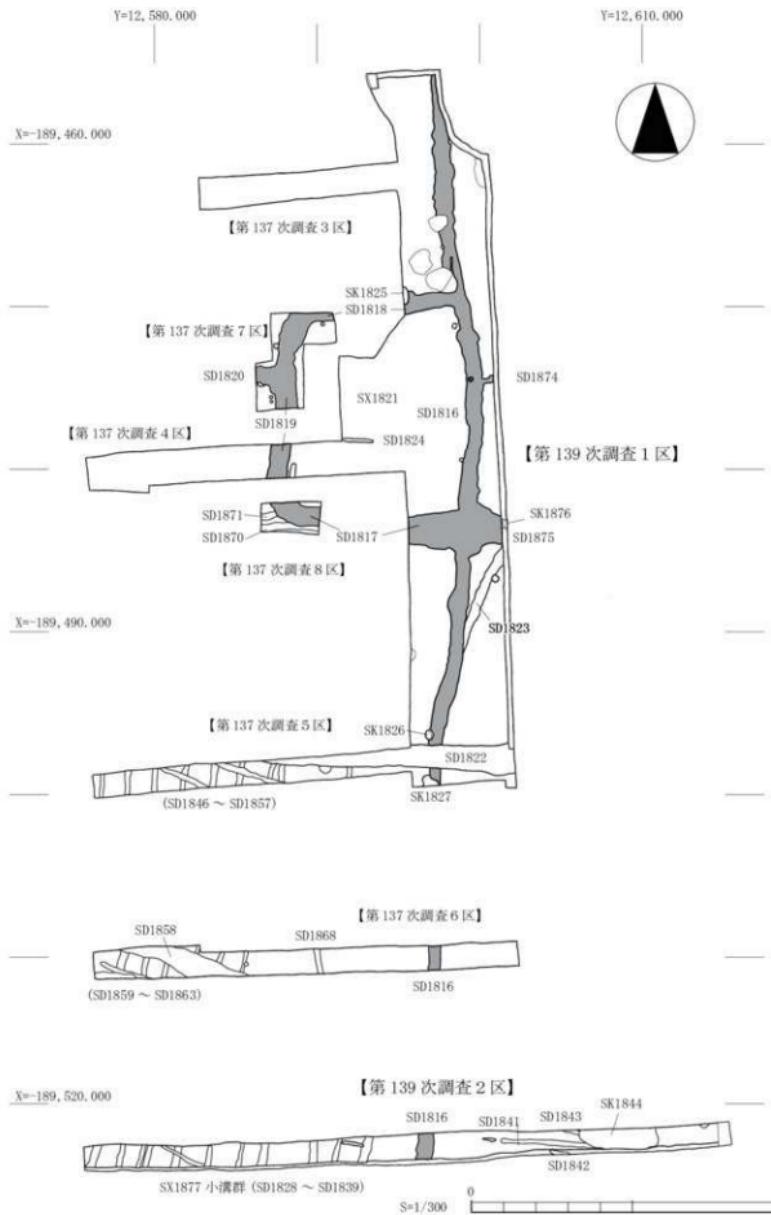
【位置】1・2区で発見した南北方向の溝跡であり、1区中央部から南側で緩やかに湾曲している。1区中央部で東西方向のS D 1817・1818が西側に接続し、同じく中央部で東西方向のS D 1874・1875が東側に接続する。

【重複】S D 1822・1823、S K 1826・1827と重複し、SD 1822、SK 1826・1827より古く、SD 1823より新しい。

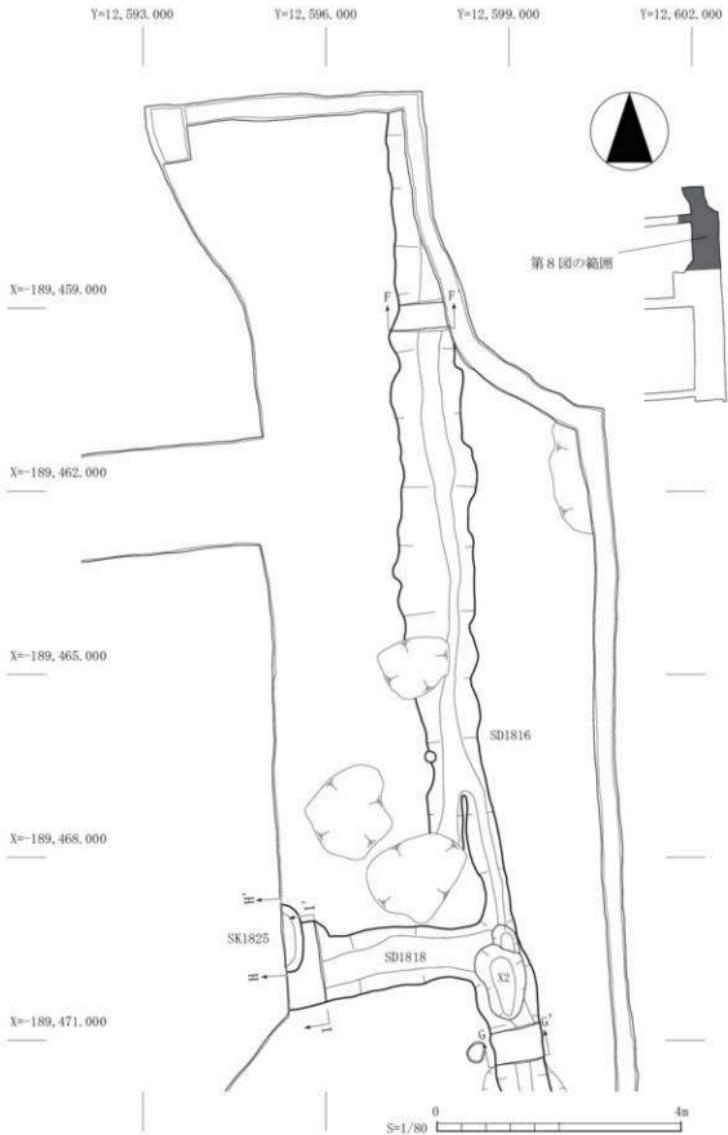
【方向・規模】1区北端と2区南端で測ると、北で約10度東に偏している。規模は2区も含めると長さ67m以上、上幅0.64～1.6m、下幅7～40cm、深さ21～45cmである。

【埋土】残存状況の良い北側で見ると、5層に分けられる。1層は黄褐色粘土、2層は浅黄色土、3層は黒褐色粘土、4層は暗灰黄色粘土、5層はオリーブ褐色土がブロック状に混入する砂層である。このうち1層には灰白色火山灰が混入している。

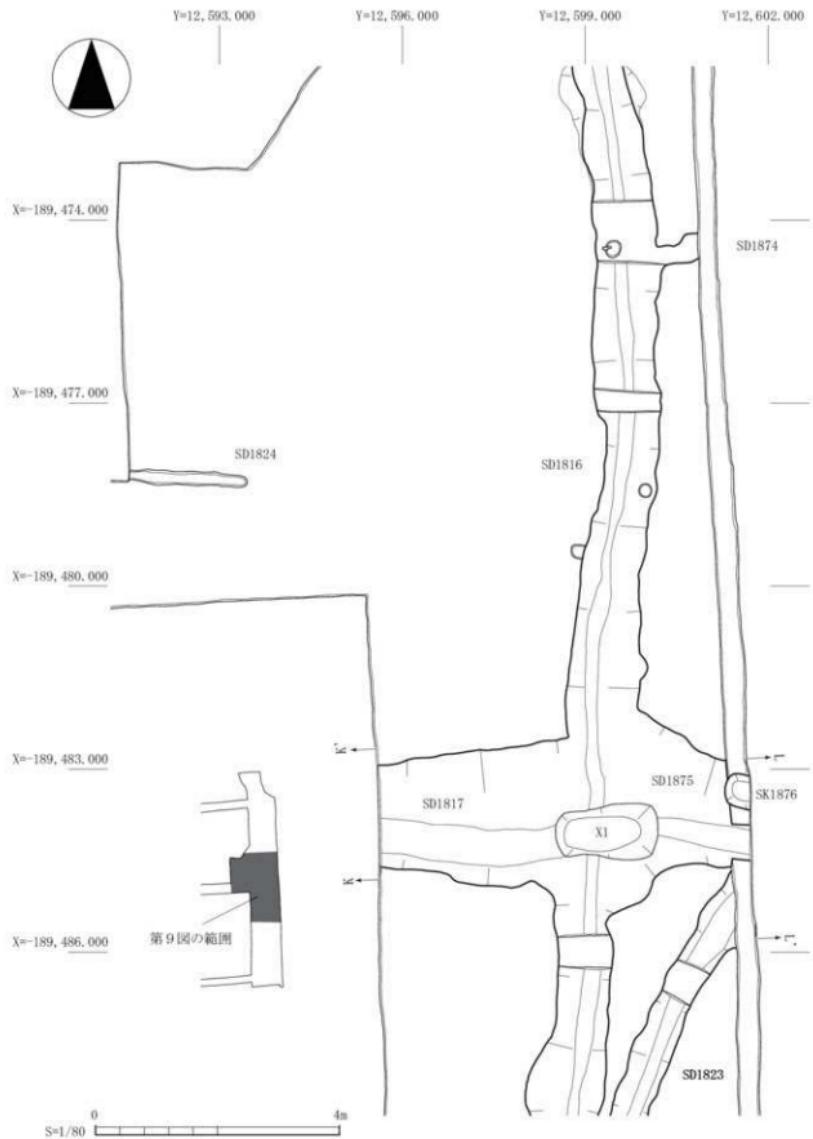
【壁・底面】壁はおよそ垂直気味に立ちあがっているが、大きく外反するところや、緩やかに立ちあがるところもあり一様ではない。底面は多くの凹凸を伴いながら、丸味を帯びて窪んでいる。1区北端部と2区南端部の比高差は32cmである。



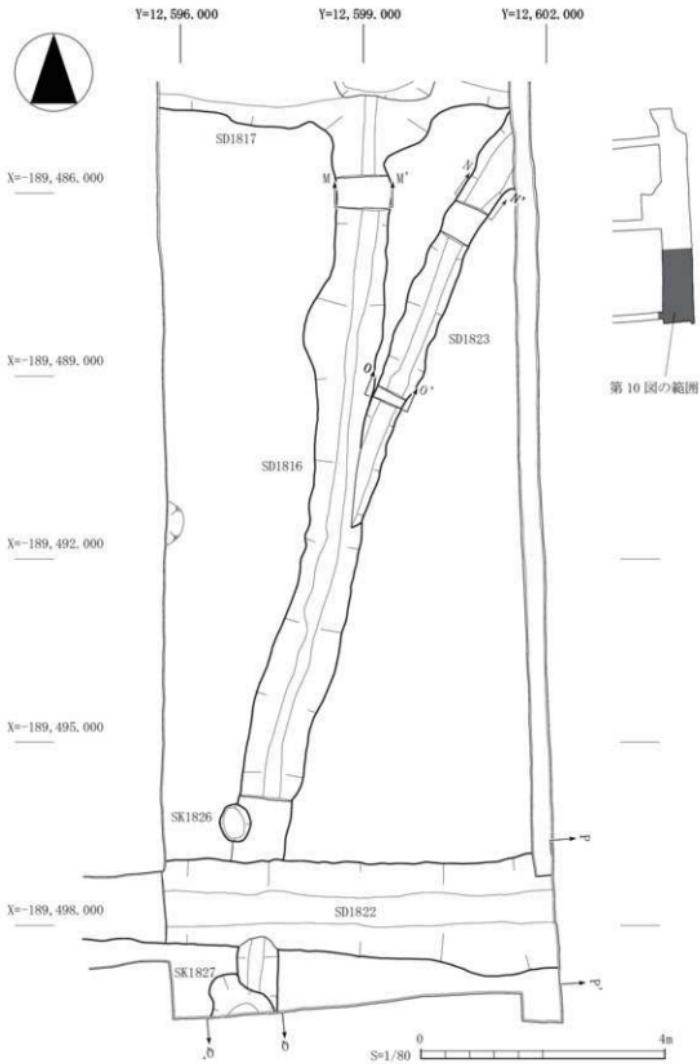
第7図 遺構配置図



第8図 1区造構平面図（1）



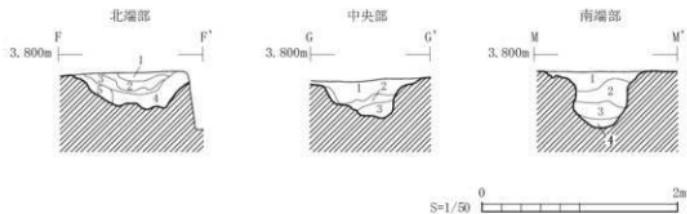
第9図 1区遺構平面図（2）



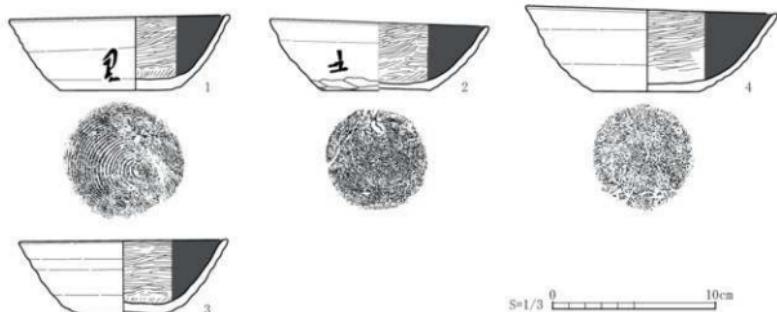
第10図 1区遺構平面図(3)

【その他】SD 1817及びSD 1818の接続部底面で土壤状の落ち込みを確認した（SD 1817接続部：X 1、SD 1818接続部X 2）。X 1は東西方向に細長い落ち込みであり、規模は東西1.68m、南北38cm、深さ44cmである。X 2は南北方向に長い落ち込みであり、規模は南北1.67m、東西38cm、深さ51cmである。いずれも底面は丸味を帯び、壁は急角度で立ち上がる。埋土はSD 1816と同じで、同時に埋まっている。

【遺物】土師器坏（B I c・B II c・B V類）が出土している。



第11図 SD 1816断面図



(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 回数	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・坏	1層下層	ロクロナデ 底部：回転糸切り／回転ヘラケズリ調整	ヘラミガキ、黒色処理	13.6 16/24	7.4 24/24	4.7	5-2	R1	B I c類 墨書き「□」
2	土師器・坏	1層下層	ロクロナデ 底部：回転糸切り／手持ちヘラケズリ調整	ヘラミガキ、黒色処理	13.4 12/24	6.6 24/24	6.6	5-3	R2	B II c類 墨書き「□」
3	土師器・坏	1層下層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(12.8) 8/24	4.9 24/24	4.9	5-4	R3	B V類
4	土師器・坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	15.5 14/24	6.5 24/24	6.5	5-5	R4	B V類 底部「×」 ～ヲ描き

第12図 SD 1816出土遺物

S X 1821 (第7・13・14図)

【位置】1区中央部で発見した、方形の区画である。

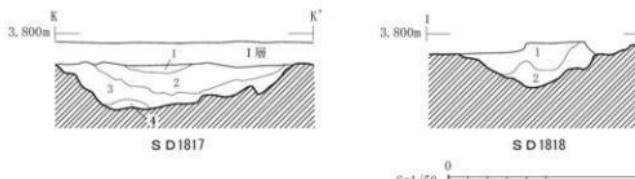
【重複】S K1825と重複し、それよりも古い。

【区画】東辺がSD1816、南辺がSD1817、西辺がSD1819（確認調査：第137次）、北辺がSD1818によって区画されている。第137次で検出したSD1819を除き、埋土の掘り下げを行った。

【方向・規模】方向は、北辺を区画するSD1818で測ると、東で約4度北に偏している。各辺の規模は東辺が約15.3m、南辺が約10m、西辺が約13m、北辺が約10.5mである。溝幅は上幅0.8～2.3m、深さは22～40cmである（最も規模の大きい南辺で測ると、上幅2.3m、下幅60cm、深さ40cmである）。

【埋土】南辺で4層、北辺で2層に分けられる。南辺では1層が浅黄色土、2層が黒褐色粘土、3層が暗灰黄色粘土、4層が砂を主体としたオリーブ褐色土であり、1層に灰白色火山灰が自然堆積している。北辺では1層が黒褐色粘土、2層が暗灰黄色粘土であり、1層に灰白色火山灰がブロック状に混入している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びている。



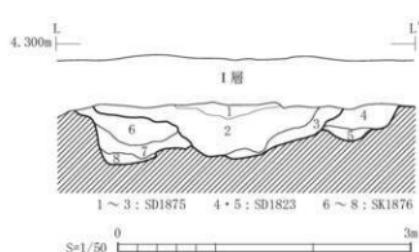
第13図 SX 1821 模式図

【出土遺物】SD1817から土師器壺（B II類）、須恵器壺（III類）、須恵系土器壺、SD1818から土師器甕、須恵器壺（III類）、平瓦（II B類）が出土している。

SD1875溝跡（第7・9・15図）

【位置】1区中央部の東壁際で発見した東西方向の溝跡である。西側でSD1816に接続する。

【重複】SD1823、SK1876と重複し、それより新しい。



第14図 SX 1821 区画溝断面図

第15図 SD 1875・1823、SK 1876 断面図

【方向・規模】方向は東西の発掘基準線に沿っている。東側は調査区外に延びており、上幅1.74. ~ 3.36m、下幅28 ~ 40cm、深さは東壁で41 ~ 44cmである。

【埋土】3層に分けられる。1・2層が黒褐色粘土、3層が黄褐色粘土であり、2層に灰白色火山灰が混入している。

【壁・底面】北側は垂直気味、南側は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められる。

【遺物】出土していない。

S D 1822溝跡（第7・10・16図）

【位置】1区南端部で発見した東西方向の溝跡であり、東・西側は調査区外に延びている。

【重複】S D 1816と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は東で約1度南に偏している。規模は長さ15m以上、上幅1.35 ~ 1.87m、下幅42 ~ 53cm、深さ60cmである。

【埋土】3層に分けられる。1層は酸化鉄を含んだオーリープ褐色粘土、2層は黒褐色粘土、3層は黄褐色土がブロック状に混入する暗オーリープ褐色粘土である。

【壁・底面】壁はやや凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面は平坦であり、東西の比高はほとんどない。

【遺物】出土していない。

S D 1823溝跡（第7・9・10・15・17図）

【位置】1区南側で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】S D 1816・1875と重複し、それらより古い。

【方向・規模】方向は北で約25度東に偏している。規模は長さ6m以上、上幅40 ~ 65cm、下幅19 ~ 30cm、深さ25cmである。

【埋土】2層に分けられる（第15図）。1層は酸化鉄を含む砂質に富んだ黑色粘土、1層は黄褐色土である。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がる。底面はやや凹凸があり、北から南に向かって緩やかに低くなっている。

【遺物】須恵器壺が出土している。

S D 1824溝跡（第7・9図）

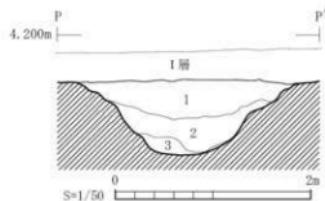
【位置】1区中央部で発見した、東西方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は西で約3度北に偏している。西側は調査区外に延びている。長さは1.9m以上で、上幅14 ~ 23cm、下幅10 ~ 16cm、深さ2cmである。

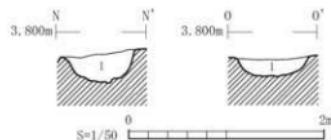
【埋土】黒褐色粘土の単層である。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。



第16図 S D 1822 断面図



第17図 S D 1823 断面図

S D1874溝跡 (第7・9図)

【位置】1区中央部の東壁際で発見した、東西方向の溝跡である。西側でSD1816と接続する。

【方向・規模】方向は東で約10度北に偏している。東側は調査区外に延びており、長さ1m以上、幅14~23cmである。

【埋土】灰白色火山灰が混入する黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S K1876土壤 (第7・9・15図)

【位置】1区中央部の東壁際で発見した。

【重複】SD1875と重複し、それよりも古い。

【平面形・規模】方形と推定される。規模は南北53cm、東西45cm以上、深さ50cmである。

【埋土】埋土は3層に分けることができる。1層は黄褐色土がブロック状に混入する黒褐色粘土、2層は黄褐色土が多量に混入するオリーブ褐色土、3層が黄褐色土である。

【壁・底面】壁はおよそ垂直に立ち上がっている。底面は若干起伏が認められ、北側に傾斜している。

【遺物】出土していない。

S K1825土壤 (第7・8・18図)

【位置】1区の北側の西壁際で発見した。

【重複】SD1818と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外にあるため全容は不明だが、

方形と推定される。規模は南北1.1m、東西30cm以上、深さ15cm以上である。

【埋土】酸化鉄や地山ブロックをわずかに含むオリーブ黒色粘土である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。

【遺物】施釉陶器平碗(古瀬戸)、染付磁器皿(有田)の小片が出土している。

S K1826土壤 (第7・10図)

【位置】1区南端部で発見した。

【重複】SD1816と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】南北に長い楕円形である。規模は南北60cm、東西50cm、深さ8cmである。

【埋土】2層に分けられる。上層は黄褐色土が混入する黒褐色土、下層は黒褐色土が縞状混入する黄褐色粘土質土である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

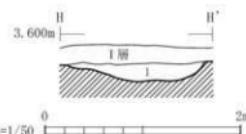
S K1827土壤 (第7・10・19図)

【位置】1区南端部の南壁際で発見した。

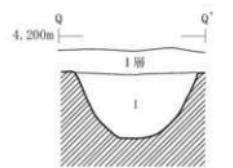
【重複】SD1816と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外にあるため、全容は不明である。規模は東西1m、南北70cm以上、深さ52cmである。

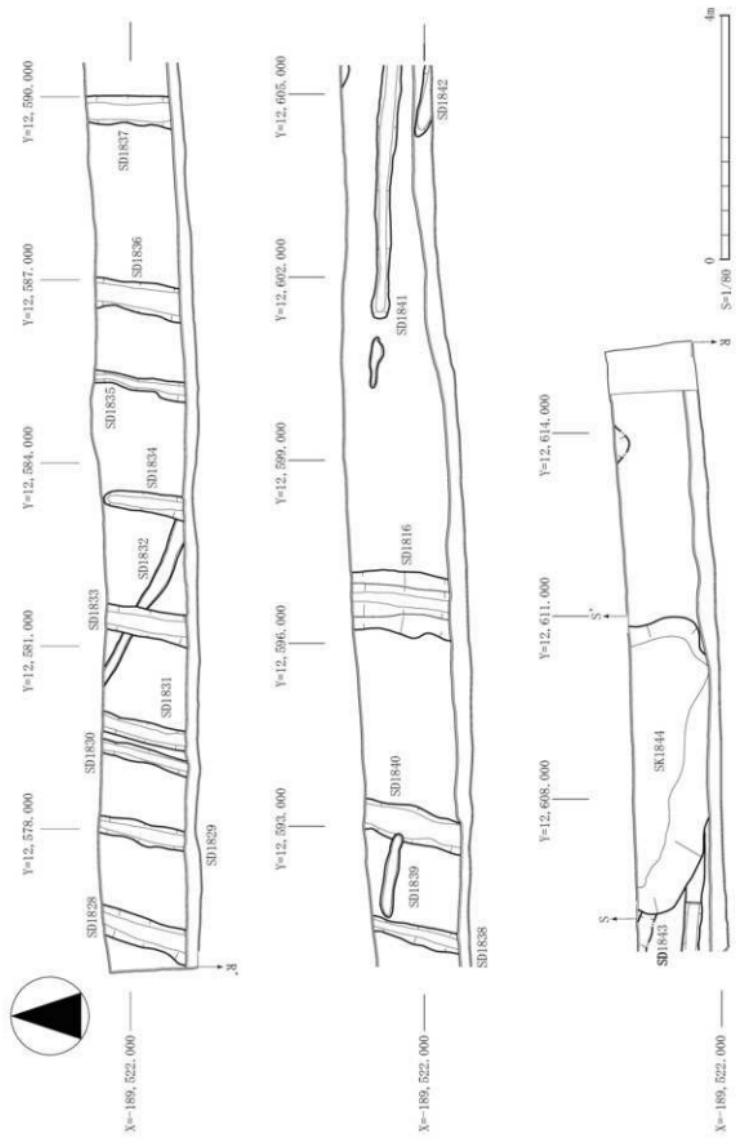
【埋土】オリーブ褐色土がブロック状に混入するオリーブ黒色



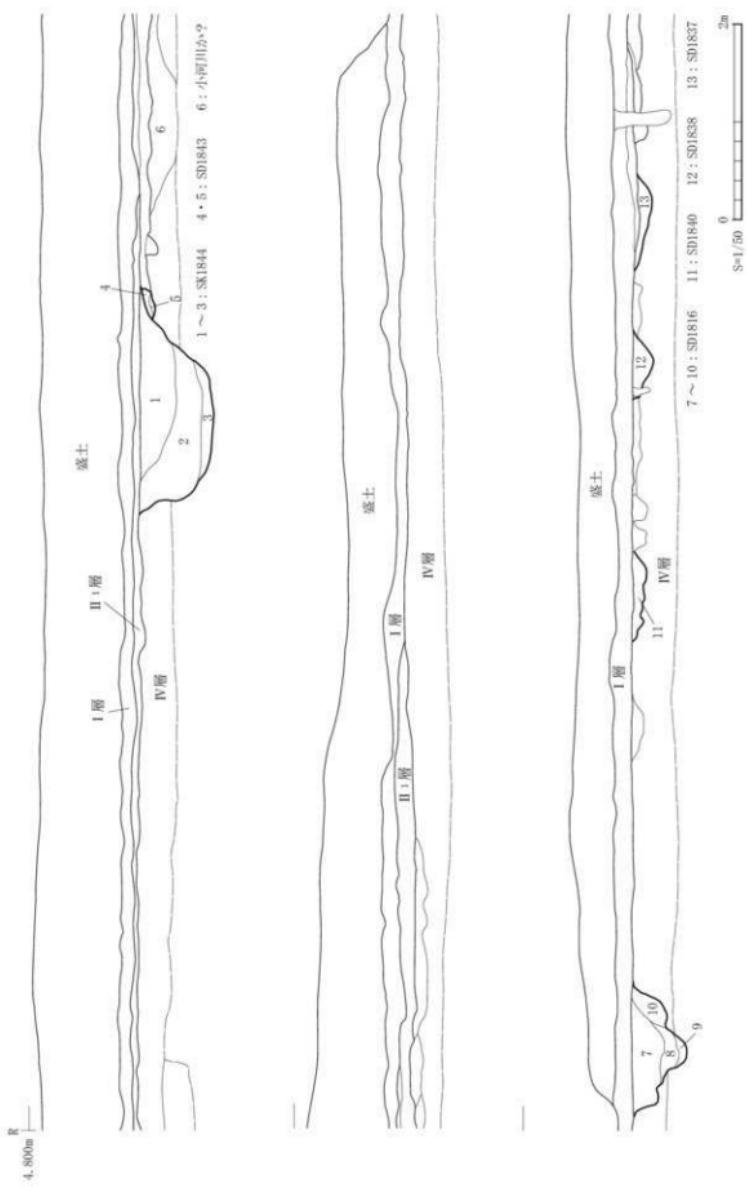
第18図 SK 1825断面図



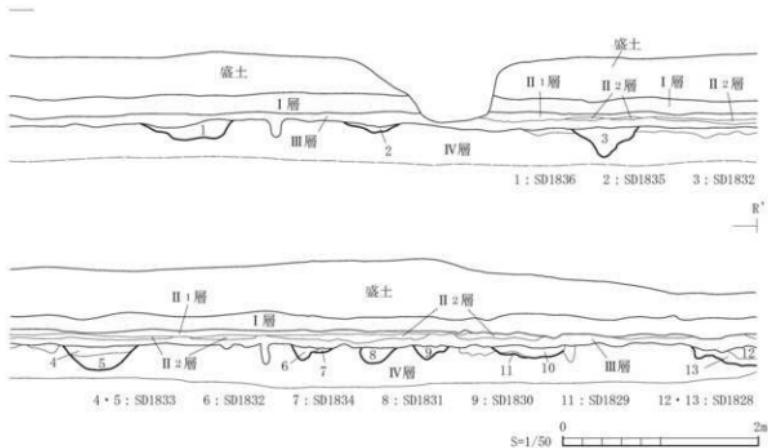
第19図 SK 1827断面図



第20図 2区遺構平面図



第21图 2区南壁断面图 (1)



第22図 2区南壁断面図（2）

粘土であり、人為的に埋め戻されている。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】出土していない。

S X1877小溝群(第7・20~22図)

【位置】2区のほぼ全域で発見した、南北方向(A群: SD1829~1832・1834~1839・1841)と東西方向(B群: SD1833・1840・1842~1844)の溝跡である。

【重複】SD1842・1843(B群)とSK1845が重複し、後者が新しい。なお、A・B群の関係を見ると、SD1834・1835(A群)とSD1833(B群)、SD1841(A群)とSD1840(B群)が重複し、いずれもA群が古い。このことから、A群→B群の関係が把握できた。

【方向・規模】A群は北で約5~18度東に偏している。規模は上幅15~64cm、下幅8~45cm、深さ2~15cmである。なおA群は幅2mにも満たない東西方向の調査区で確認したことから、溝全体の長さを把握できたものはない。B群は西で約4~28度北に偏している。規模は上幅15~22cm、下幅10~22cm、深さ3~11cmである。A群同様、溝全体の長さは明らかでない。

【埋土】A・B群とともに、単層のものと2層に分けられるものがある。単層のものは黒褐色粘土である。2層に分けられるものも上・下層ともに黒褐色粘土が主体であるが、下層には黄色土がブロック状に混入している。

【壁・底面】壁はA・B群とともに、垂直気味に立ち上がるものと、緩やかに立ち上がるものがある。底面も平坦なものと凹凸があるものがあり、一様ではない。

【遺物】A・B群ともに出土していない。

S K1844土壤 (第7・20・21・23図)

【位置】2区の東側で発見した。

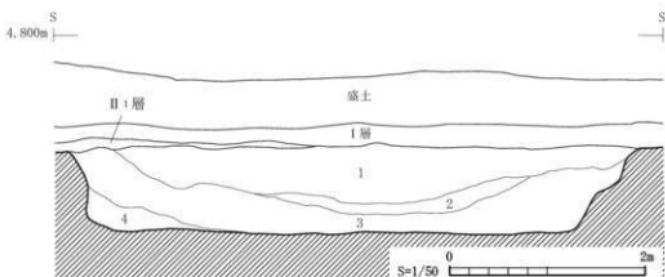
【重複】SD1841・1843と重複し、それらより新しい。

【平面形・規模】大部分が調査区外にあるため、全容は不明である。規模は東西4.3m以上、南北1.5m以上、深さ75cmである。

【埋土】4層に分けられる。1層は暗灰黄色粘土がブロック状に混入するにぶい黄色土、2層は酸化鉄を含むオリーブ褐色砂、3層はオリーブ褐色砂が混入する暗灰黄色粘土、4層は酸化鉄を含む黄褐色砂である。このうち、1・2層は人為的に埋め戻されている。

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がり、上半でやや開く。底面は平坦である。

【遺物】出土していない。



第23図 SK 1844 断面図

4 遺構の年代

ここでは検出した層序ごとに遺構の年代等について検討する。

(1) VI層発見遺構

S X 1872水田跡及びS X 1873を検出した。このうちS X 1872水田跡の区画④から、非クロクロ調整の土師器小型壺が1点出土している。口縁部は直線的に外傾する単純口縁で、頸部の屈曲は器体中央部より上方にある。体部はやや下で膨らみ、最大径は中央よりやや下にある。底部は平底である。このような器形は古墳時代前期の土器の中に認められ、丹羽編年で第II B段階及び辻編年でIII-1期とされている藤田新田遺跡SD224出土土師器壺C 3類や、前期でも後半段階とされる佐沼城跡SD105出土土器土師器壺III b類と類似していることから、同時期のものと考えられる（註2）。のことから、S X 1872水田跡（VI層）の年代についても、古墳時代前期後半段階と捉えておきたい。

なお、S X 1872のAMS分析結果は、暦年較正年代（ $\delta^{14}\text{C}$ ）140～232cal ADであり、出土遺物の年代観より1世紀程古い結果が得られている（附図参照）。

ところで、本地区周辺では、東側150mの地点においても古墳時代前期の水田跡11区画を確認している（山王遺跡第88次調査）。検出した標高は2.65～2.76mであり、今回発見した水田跡の標高値2.58～2.66と近似している。区画の規模をみると、第88次調査区では南北2.7～3.5m、東西では最大4.2mと推測しているのに対して、本地区では南北約3.8m、東西3.7mであり、およそ同規模の水田区画と考えられよう。畦畔の方向は、第88次・139次いずれも北で東に傾いている。さらに、北側約80～100mの地点で実施した山王遺跡第83・90・91次調査においても古墳時代前期の水田跡を発見しており、第88・139次と方向が近似する畦畔を確認している。

これらは、本地区周辺で広範囲に確認される古墳時代前期の水田が、同一の基準で造られた可能性を示すものである。

(2) IV層発見遺構

1・2区では区画施設、溝跡、土壤などを発見した。これらの遺構の検出面や新旧関係について整理する以下のようなになる。

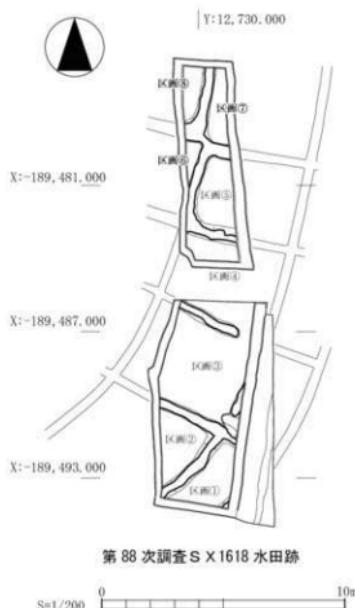
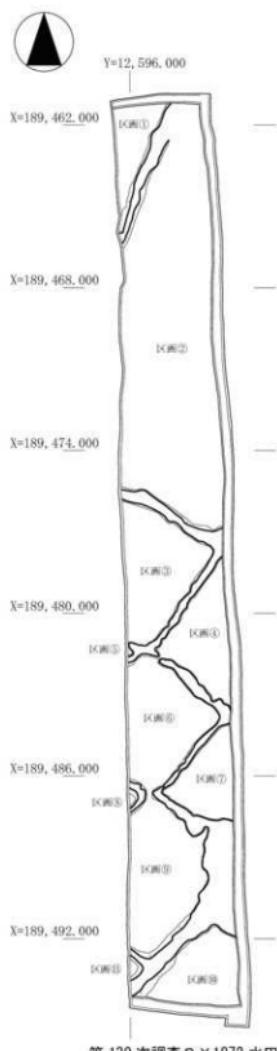
1区発見遺構

1区では、10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰を境に、降下以前に機能していた遺構（I期：SD1816・1817・1818・1823・1874・1875、S K1876）と降下以降に機能していた遺構（II期：SD1822、SK1825・1826・1827）に大別することができる（註3）。

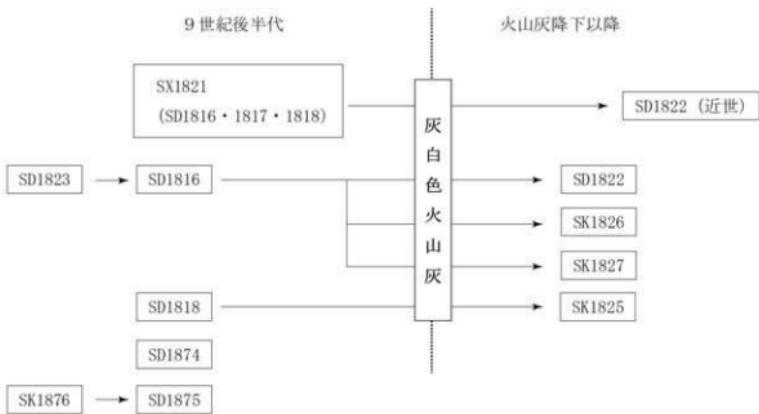
I期遺構のうち、SD1816埋土下層から、土師器壺が3点出土している。B I c類が1点、B II c類が1点、B V類が1点であり、いずれも完形に近い。底径／口径は0.38～0.54、器高／口径は0.33～0.35である。底部内面のヘラミガキは、全て中央から放射状に施されている。このような壺と類似するものは、

註2：器面調整をみると、外面の最終調整に縱方向のヘラミガキが口縁部から体部下半に施される点では本調査出土壺と佐沼城跡出土壺III b類は近似しているが、藤田新田遺跡出土壺C 3類では体部下方の最終調整がヘラナデである点で異なっている。佐沼城跡では、SD105から出土した一括資料には、丹羽編年II～III段階、辻編年III-2～4段階のものが含まれている。このことについて、報告書では、これら土器に見られる多様さを個々の土器製作者の由来や製作の知識などを反映したものと理解し、前期後半段階の土器編年再考の必要性を提示している。

註3：SD1816～1818・1874・1875については、埋土上位に灰白色火山灰が混入していたものの、最下層には認められなかったことから、溝が開削されたのは火山灰降下以前であると判断した。



第 24 図 S X 1872 水田跡と第 88 次調査 S X 1618 水田跡



第25図 1区発見遺構変遷模式図

9世紀後半代とされている多賀城跡鴻の池第10層出土土器と類似している（註4）。このことから、SD1816の年代も同様の年代と考えられる。これと一連の区画を構成するSD1817・1818・1874・1875についても、同様の年代と理解することができる。

重複関係でSD1816よりも古いSD1823、同じくSD1875よりも古いSK1876は、9世紀後半以前のものである。

II期遺構では、SK1825から古瀬戸皿や有田産染付磁器丸碗の小片が出土していることから、近世以降のものと捉えられる。それ以外の遺構については、出土遺物がないため、年代は明らかではない。

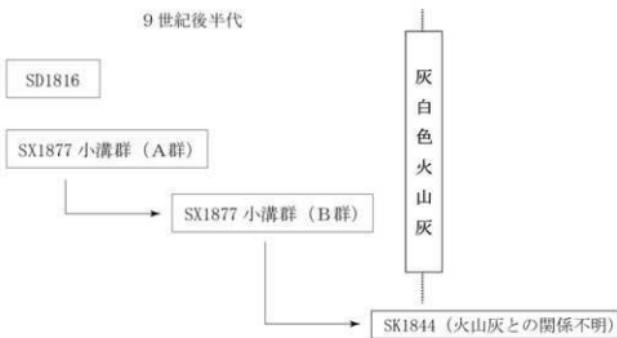
2区発見遺構

SX1877小溝群のうち、SD1828～1831・1834～1836（A群）、SD1832（B群）は灰白色火山灰が混入するIII層に覆われている。これら遺構の埋土中には灰白色火山灰が全く混入していないことから、火山灰降下以前に埋没していたものと考えられる。このことから、SX1877A・B群は、ともに10世紀前葉以前の年代が与えられる。

なお、SX1877に見られるような並行に連続する小溝群については、畑の耕作痕（畝状遺構）と考えられている。また、SD1816の西側には小溝群が広範囲に検出されており、東側では南北溝跡が確認されていないことから、本溝跡は生産域と非生産域を区分する性格も兼ねていたと考えられる。

SK1844については、SX1877B群よりも新しいものの、出土遺物がないことや灰白色火山灰との関係が不明であることから、年代については明らかでない。

註4：鴻の池10層出土土器土師器では、口径／底径が0.36～0.46、口径／器高が0.27～0.38であり、底部内面のヘラミガキは放射状に施すものが基本である（『多賀城跡調査研究所年報1991』1992）。



第26図 2区発見遺構変遷模式図

5 まとめ

- (1) 1区のVI層上面で古墳時代前期の水田跡を発見した。
- (2) 1区のIV層上面では、9世紀後半代の区画施設SX1821やSD1816溝跡を発見した。
- (3) 2区のIV層上面では、灰白色火山灰下以前の畑跡SX1877（A→B群）を発見した。これら畑跡のうち、A群についてはSD1816と方向が近似していることや、一定の距離をおいて設けられていることから、同時期に機能していた可能性が高い。
- (4) 当該区は古墳時代前期には水田耕作域、古代には畑跡が営まれており、主に生産域として利用されていた地区であることが明らかになった。

引用・参考文献

- 宮城県教育委員会 日本道路公団『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書 第163集 1994
 迫町教育委員会『佐沼城跡－近世武家屋敷と古代の集落跡－』迫町文化財調査報告書 第2集 1995
 宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所1991』1992

附章 山王遺跡第139次調査における放射性炭素年代測定（AMS測定）報告

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

山王遺跡（第139次調査）は、宮城県多賀城市山王字山王四区195-2外（北緯38° 17' 45"、東経140° 58' 26"）に所在し、自然堤防の南側に広がる沖積地に立地する。測定対象試料は、SX1872水田跡VI層水田土壤と、その直下の自然堆積層と見られるVII層から採取された土壤各1点である（表1）。SX1872水田跡VI層は古墳時代前期（4世紀）に位置づけられている。

2 測定の意義

SX1872水田跡VI層と同時期と見られる水田跡は近隣の調査区でも確認されているが、水田跡は出土遺物が少なく、具体的な年代決定が困難である。このため、VI層とVII層の土壤の年代測定によって、V層水田土壤の年代とその上限年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。
- (2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。
処理には1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用い、表1に「HCl」と記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は δ¹³Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 (±1σ) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、0xCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の¹⁴C年代は、1が $1820 \pm 20\text{yrBP}$ 、2が $2060 \pm 20\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、1が $140 \sim 232\text{cal AD}$ 、2が $110 \sim 3\text{cal BC}$ の間に各々複数の範囲で示され、1が弥生時代後期頃、2が弥生時代中期頃に相当する (小林2009)。

なお、試料1が含まれる1～3世紀頃の历年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾崎2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いて試料1の測定結果を历年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

このため、1の較正年代については、推定される古墳時代前期 (4世紀) 頃まで下り、調査所見と整合する結果となる可能性がある。

試料の炭素含有率は1が3.1%、2が2.8%で、土壤としては低くない値となっている。化学処理、測定上の問題は特に認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-133456	1	S X1872水田跡 VI層	土壤	HCl	-21.46 ± 0.28	$1,820 \pm 20$	79.70 ± 0.25
IAAA-133457	2	VII層	土壤	HCl	-17.93 ± 0.34	$2,060 \pm 20$	77.43 ± 0.23

[#6392]

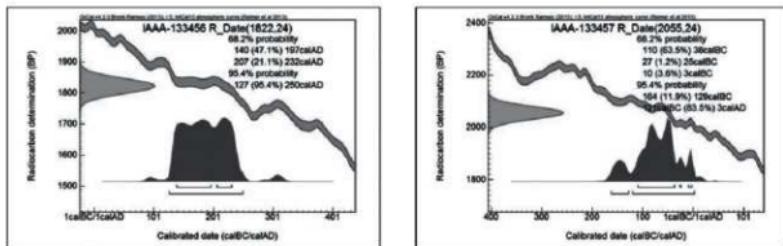
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)		1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)				
IAAA-133456	1,760 ± 20	80.28 ± 0.24	1,822 ± 24		140calAD - 197calAD (47.1%) 207calAD - 232calAD (21.1%)	127calAD - 250calAD (95.4%)
IAAA-133457	1,940 ± 20	78.55 ± 0.23	2,055 ± 24		110calBC - 38calBC (63.5%) 27calBC - 25calBC (1.2%) 10calBC - 3calBC (3.6%)	164calBC - 129calBC (11.9%) 121calBC - 3calAD (83.5%)

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90
- Suiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



[図版]暦年較正年代グラフ(参考)



1区 S X 1872水田跡全景（北より）



1区 S X 1872水田跡全景（南より）



1区 S X 1872水田跡全景（南東より）



1区S X 1872水田跡南半部
(北東より)



1区水口3 (南より)



1区北壁土層堆積状況
(南より)



1区調査区全景（北より）



1区調査区全景（南より）



1区S D 1816完掘状況（南より）



1区S D 1823完掘状況（北東より）



1区S D1816・1818完掘状況
(南東より)



1区S D1822完掘状況(東より)



2区調査区全景(西より)



1



2



3



4



5

1 土師器壺（第6図1）
2～5 土師器壊（第12図1～4）

写真図版5

報告書抄録

ふりがな	さくらいたてあとほか
書名	桜井館跡ほか
副書名	桜井館跡第3次調査 西沢遺跡第25次調査 山王遺跡第139次調査
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第115集
編著者名	相澤清利 石川俊英 小原一成
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134
発行年月日	西暦2014年3月31日

多賀城市文化財調査報告書第115集

桜井館跡ほか

桜井館跡第3次調査

西沢遺跡第25次調査

山王遺跡第139次調査

平成26年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368-0134

発行 多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141

印刷 株式会社 工陽社
宮城県塩竈市尾島町8番7号
電話（022）365-1151

